きものなりといふ、余本より素人にして其の適否を判定する力なしと雖も謡曲の常體と文章の意味により兩者何れにも偏せざるを以て穩當のものならんかと思へり、謡曲進行の順序としては、此所に於て更に深き心持を要する程の事なし、然れ共文句柄といふ事も亦謡曲の注意すべき一要點なれば、位に於ては普通の順序に從つて重くせず、サラリとハコビて謡ふ内に文句柄丈けの心持を謡ひ得ぬことはあらざるべし、依て心持は夜更け人静るの意味によりて位は終局前のロンギの常體に取らば蓋し作者の本意を得たるものといふを得べきならんか。

シテはシツポリと居付ぬ樣にうたふ。

今は早や夜も更け人も静りぬ……

思ひよらずや誰なれば……

地はスカサズ引取りてサラリと引立ち。

扨は嬉しや我こそは……

シテも驚きたる心持ちに氣を掛け。

そも通俊は我父の……

双方隙さず謡ひ進み親ながらより次第に詰め、シテはシテ柱の方へ逃げ行くをワキは追ひすがりて引止め父は追付きにてシックリと鎮める心持にて後は引立ち伸々と心嬉しくワキ止めにて目出度終局となる。

鞍馬天狗

前シテ……山伏　後シテ……大天狗
子方……牛若外公達　ワキ……僧　處……山城

牛若丸鞍馬山にて大天狗より兵法の奥儀を授かりしと云ふ口碑に基きて作られし天狗能の一種なれ共、先づ櫻花を以て美景を添へ、之れに配するに愛らしき稚兒を以てし、春陽觀櫻の盛筵和氣藹然たり、忽ち起る一陣の凄風梢を拂つて光

景一變す、され共花は尙夷然として咲けり、失意の稚兒は尙止りて、物凄き客僧と睦み語り、情景しめやかにして閑かなり、再び起る雄壯の雲、見る〳〵全山を被ふて山河爲めに震動す、可憐は變じて勇健となり、悽愴は化して魁偉となり、堂々悠々、壯にして快、剛にして溫、變化の妙、景あり情あり、得易からざる作曲なり、多くの天狗物中、第一に重要せらるゝこと偶然に非ざるなり。

先づ囃子方坐着くを見て頭巾、篠掛、厚板、大口、水衣、腰帶、小刀の裝ひにて珠數と扇を持ちシテ出づる、舞臺に入り常の立所に立ち、堂々と丈夫に謠ふ。

か樣に候者は、鞍馬の奥僧正ヶ谷に住居する客僧にて候……

名乘り終り後見坐にクツロギ、狂言方能力文を持ちて出で、西谷の花見に付き東谷へ使ひに行く由を語り橋掛りの方に行きかゝると同時に、牛若を先に立て箙の着附に長袴を着たる子方數名の後に續き、角帽子、水衣、大口の僧脇三人出づる、狂言は之れを見掛け、西谷よりの使ひなりと文を脇へ渡す、ワキは文を受取り角掛けて正面を受け、穩かに麗しくうたふ。

何々西谷の花……

此のワキは唯此の文を讀むと、舞臺に入りて狂言とのセリフあり、子方を先に立てて引込む丈けのことなれ共、此の文の讀方にて、今や當山櫻花滿開一刻千金の好時季たることも想像せられ、狂言とのセリフに依りて、貴公子を伴へること、盛筵を開ける模樣も知れ、其場合の光景を顯す爲めに輕からざる役前なり、若し此のワキの拙劣なる時は、鞍馬天狗前半の趣味は發揮し能はざるに終るべし、一見シテとは關係無きが如くなれ共決して然らず、此のワキにして能く此の場合の趣きを寫し出せる時は、其後のシテの技に就ての感じ良く頗るやり易きものと知るべし、うるはしく應揚に讀みし文の終りを受け、居付かぬやう伸々とうるはしくうたふ。

花咲かば告げんと言し山里の
手折枝折といふ所にて子方より順次舞臺に入り地謠一ぱいに脇坐へ居並ぶ、ワキは

能力を呼び、少人を伴ひてある間何にても一曲奏せよと命じ、能力は張子のかほやぬりちがふ云々の小舞を舞ひつゝある内に、シテは後見坐より出で舞臺の正面へ來り端坐す、小舞の内とは言へ、早きに過ぎては狂言の邪魔となり、遲きに過ぎては狂言の技に差支へあり、手まりやおどろといふ邊りに坐せば、狂言方手束弓と弓を引く形をすると同時にシテを見認めることゝなる、なんでもなき樣のことなれ共、此邊の順序を都合克くするは老功者にあらざれば能はざる所なり、狂言は此のシテを見て怪しみワキへ之れを告げて急ぎ引立て申すべしと言ふを、尋常事にあらずと見たるワキは之れを制止して、子方を促して歸る、此所の謠も悠々迫らず落着きて謠ひ徐に幕に入る。

花は明日にても御覽候へ……

牛若一人殘り、子方を先に立てゝワキは入る、狂言はシテに向ひ、不平を鳴らしつつ引込む、總て幕に入りたるを量り、シテは徐にドッシリと謠ふ。

遙に人家を見て花あれば即ち入る……

牛若はシテを見てサラリと謠ふ。

實や花の本の牛日の客……

シテはドッシリと牛若はサラリと此兼合を以てシットリと地へ渡す、地は居付かぬ樣に伸々と引立て謠ふ。

御物笑ひの種蒔くや……

通常の應答となりてはシテはシッカリ牛若はサラリと謠ふ。

いかに申し候、只今の兒達は皆々御歸り候に……

みづからも同山には候へ共よりは幾干か憂の心持を含むべきなれ共、子方の謠の小マセクレたる聞程き苦しきはあらず、サラリと可愛らしく謠はすべし、シテは相變らずドッシリなれ共、内に憐を含む心持あり。

あら痛しや候……

シテのシッポリと渡すを受け、地もシンミリと謠ふ。

みる人もなき山里の　櫻花……

伸び〳〵と謠ふ内に物すごき心持を含ませシンミリと謠ふ。

松嵐　花のあと訪ひて……

此の所シテの大いに心持を示す腹藝の場所にて、夕べを殘す花の邊りと少しく見上げ、鐘も聞えて夜ぞ遲きと遙に梵鐘を聽く心持ち、見る人聽く人をして、物凄き鞍馬の山中に在るの思ひあらしむべし、此所こそ實に此の前半中の見所聞所なれ。

打切にて少しく氣を換へ引き立つ心持にて。

さても此程御供して……

シテは立ちて子方の前に行き之れを誘ひて花を見する形あり、子方は脇坐へかへり、シテは立所へ立つ、又打切ありてスッカリ氣を換へ大に引立ちてサラリと子方は謠ふ。

去にても如何なる人にましませば……

引立ちて丈夫に。

今は何をか包むべき……

地は丈夫に受取り、次第に詰めて勇ましく威ひよく謠ひ進み、返しの立雲よりシッカリと鎮まり來序にてドッシリと中入となる。

間狂言木葉天狗一人出で來り、大僧正沙那王に兵法を授けし次第を語るのと、三人の小天狗出で、沙那王と立合はねばならぬに依て稽古するとて、仕合をなして引込むのと二樣あり。

サラリと威ひよき一聲にて子方出づる、白鉢卷に白練箔の坪折、大口を穿き長刀を擔ぎ出で、舞臺に入り長刀を突き謠ふ。

扨も沙那王がいでたちには……

地はドッシリと太く謠ひ次第に靜まり大べしとなる。

譬へば天冥鬼神なりとも……

此地謠につれて子方は脇坐へ行き立つ。

大べしの位のドッシリと丈夫なるにつれ、堂々悠々とシテ出づる、赤頭の上に大頭巾、狩衣、半切にて羽團扇を持つ、舞臺へ入り何所迄も太く丈夫にうたふ。

抑是は鞍馬の奥僧正が谷に住む……

此邊總てドッシリと丈夫なる趣きにて、シテの技も寛裕りと太し、霞とたなびき雲となつてと舞臺の正面へ出でゝ膝を突き、月は鞍馬と頭の毛を持ち上げて見渡す所など此邊にての技所なり。

太鼓の頭につれて俄に早くなり威ひよく謠ひ進む。

谷をひゞかし嶺を動かし……

一陣の烈風石を飛ばし木を折るの勢ひ、羽團扇を二度程打合す所最も力を用ゆべき所なり、白頭となる時は、大べし邊りより一層靜かに位を付け、羽團扇は後にさして、カセ杖を突き、月は鞍馬は橋掛にて謠ひ、谷をひゞかしよりは更に急調となりて變化を大いにすることゝなる、小書付きには兎角不感服なる小細工多きも、此の鞍馬天狗の白頭は、數層の趣きを添ふる心地して壯快なり、此の地謠の終りのおびたゞしやと止める工合と、シテの如何に沙那王殿と謠ひ出す鹽梅とは、其の間實に髮を容れざる呼吸場所、地謠とシテとの大いに注意を要する所なり、地謠の終りの垂れて威を缺くか、シテの謠ひ出の遲れて呼吸を拔かずかの如き事あらば、既に鞍馬天狗の能の價値は無きものと斷定して可ならん。

シテは丈夫に太く謠ひ、子方は活潑にサラリと謠ふ。

いかに沙那王殿……

羽團扇にてあふぎながら太く謠ふ。

おゝ勇々しゝ〳〵

床几に掛り悠々とドッシリ語る。

昔漢の高祖の臣下……

引立ちて威ひよく。

張良　沓をさゝげつゝ……

太鼓の頭に連れ威ひよく謠ひ進む、シテは子方の長刀を取り、之れを持ちて舞ふ。

抑武略の響れの道……

此の切りは總て勇壯快活の心持故、謠も技も十分に勇ましくすべし、然し天狗ものたる位は常に忘れられず、木深き鞍馬の山中、谺谿に響く木刀の音高く世に聞え、咲きかへる稚兒櫻の色さえて、賴母しくも亦勇ましゝ。

繪馬

前シテ……老翁　ツレ……嫗　後シテ……天照大神
ツレ……男神　ツレ……女神　ワキ……官人
處……伊勢

神事能の一種にして、大三十日に行るゝ繪馬の神事の叙事を兼ね、神と君との離る可らざる關係を顯せるものなるが、繪の緣よりして僧正遍照の歌の樣を叙せる古今集の序文に及び、遊女より戀路、戀路より夫婦と緣を引き中入としたるに付き此邊り總て和吟にて謠ふこと神物としては異例なる丈け、又一種溫柔の趣きを含み、切りにも亦和吟の個所多く幾干か特種の趣きあり脇能なり、後シテの天照大神を、女神としたるは喜多流の重き習ひ能にて繪馬の女體といふ、女體となる時は、後のツレは女神力神と分れ、女神は神樂を力神は急の舞をまふなどの變化もあり、下掛りにては通常ツレは天女兩名なれ共、上掛りにては普通として男女兩神のツレとす、要するに一種風變りの神事能なり。

囃子方座に着けば、緞子にて三方を包み前側に左右に開扉を附せる宮の作り物を臺に載せ大小の前へ出す、作り物出揃へば囃子方は坐を構へ、脇の次第を打ち、此の次第にて脇の三大臣出で脇能次第を最も勇ましく勢ひよく謠ふ。

治めしまゝに世を守る、〽、伊勢の宮居に參らん

連は坐し脇は中央へ出で正面向きて最も威勢よく名乗る。

抑　是は大炊の帝に仕へ奉る臣下なり……

名乗り終ると一定の拍子の間に脇は元の坐に復し、連は立ち、並び對して勢ひよく道行を謠ふ。

風は上なる松本や……

中の打切より脇は道行の形として前へ進み舞臺の前より折れ返して中央へ迄道行の謠一ぱいに行き止り、正面向きて伊勢齋宮に着きたる由を云ふ。

急ぎ候程に……

脇は脇坐に行きて並び坐し、囃子方はシテの出の一聲を打つ、此の一聲も眞の一聲と稱し五段の規則なれ共近時は略さるゝ事多し、連れを先に立てゝツレ出で、ツレは一の松の所、シテは三の松の所に立ち止りて向き合ふ、シテは老翁にて、尉の面、尉髪、熨斗目又は小格子厚板の着付、大口を穿くもあり、水衣の肩とらず、白馬の繪の額を持つ、流義により片手に杖を突くもあり、ツレは姥にて、姥かづら、姥髪、箔の着付、厚板の着流し、水衣の肩とらず、黒馬の繪の額を持つ、流義によりては若き女とし、唐織の着流しとなすもあり、大小の打つ靜め頭にて篤と靜まり、神々しく森々と物幽かに謠ひ出す。

あら玉の春に心を若草の……

一定の鼓の拍子の間に、シテ、ツレ共に正面に向ひ、ツレは幾干か引立ちたる心持にて謠ふ。

霞も雲も立つ春を……

連の謠の終りより、再びジリ、ツと向き合ひシツポリと謠ふ。

去年とやいはん年の暮……

一聲の謠終ると連より先に立ち靜かに舞臺に入り、ツレは大小の前、シテはシテ柱の前より三尺計りも前へ出たる立所に立ち正面向きてサシをサラリと謠ふ。

夫れ馬を華山の野に放ち

連吟となれば向き合ふ、下げ歌は押へて静かに上げ歌は引き立ちてうたふ等總て打切にて位を定め、上げ歌の終りにシテツレ入り代りてシテ大小の前へ立つ。

然ればかしこき世のならひ……

脇はシテの方を見て詞を掛くる、闇夜に人音を聞き、其れを便りに呼び掛る心持肝要なり、流義によりては唯通常の通り如何に是れなる人に尋ぬべき事の候となり居るもあり、其方なれば別に心持は入らず。

不思議やな早夜半に過ぎ候に人音の聞え候……

シテの答はドッシリと、ツレはサラリ、ワキは勢ひよく、三人の趣き違ひて呼吸を抜かさず謠ひ進みて地へ渡す、此問答の内には、シテとツレと繪馬を掛る前後に付て爭ふことあれば、其心持肝要にてツレは際さずサラリと掛りて謠ふなり、實に言れたり此程はよりは爭ふ心解けて和合となる、本より爭ふとて不和の爭ひにあらねば、怒氣を含まざること勿論にて氣の掛るのみ、されば和合となるも唯其心持のみにて、謠は相變らずサラリなり、同じサラリの中にて、爭ふと合意の心持の別を見する事此ツレに就て心の用ゐ所なるべし地は際さず受けとり勢よく麗しくうたふ。

かけまくも忝なや……

地謠になりシテは右へ向ひ出で、ツレと入替り、ツレは繪馬を作り物の扉にある釘に掛けて笛坐の上に坐し、シテも是れをぞ頼むと、繪馬を作り物に掛け、打切の所にて扇を抜き持ち正面を向く、地は麗しく引立ちて次を謠ふ。

加茂のみあれのひおりの日……

シテは是れを物見より前へ出てサシ、ヒラキ、右廻り等の形あり曲の前に脇へ向き下に居る。

クセはシテに形なし、地は居付かぬ樣可愛らしく謠ふ。

僧正遍照は……

上げより引立ちて謡ふ事常の如く、疑ひ波の川竹のよりシテは立ちくつろぎ、夜も明け行かばにてワキを卷さしヒラキ右へ廻り開き來序にて中入となり、ツレも後より入る、中入に出づる間のアシラヒに就て太鼓方に習ひもあり、間は末社の時もあり、又鬼の出づる時もあり。

山羽にてツレ二人先へ出でゝ舞臺に入りて並び立ち、シテは橋掛に立つを見て、地謡より謡ひ出す、シテは黒頭、白鉢卷、唐冠又は透冠、厚板、狩衣、半切、腰帶、扇にて面は三日月、たか、神體の類、ツレは天女二人常の通り扇を持ち出で神樂の前より幣を持つ、流義によりては一は天女、一は男姿にて、面邯鄲男、金風折、黒垂れ、白鉢卷、厚板、單狩衣、大口にて、榊の杖又は幣を持つ、天女も又初より幣を持つなどの差あり。

地謡は勢ひよく太く滯らざる樣に謡ふ。

雲は萬重になさまりて……

シテは靜かに太く氣高く堂々とうたふ。

我は是れ日本秋津島の大頭領……

頭を聞きて後地は伸び〳〵とうたふ。

和光利物はみもすそ川の……

シテは太く謡ひながら下をさし廻して開く。

水をけたつる波の如し……

地は太く勢ひよく謡ひシテ舞臺に入る。

されども眥ひは虛空に充ちくる……

シテはドッシリと謡ひながら右の足にて拍子をふむ。

所は齋宮の名にふりし

地も相變らず太く謡ひ進み、あらはに神體より勢ひよくサラリと謡ひて神舞に掛る、

神舞濟みてシテはシッカリと、地は勢ひよく幾干かハコビて謡ひ進み、さていつま

でかと位をシヅメ吟も變るシテは日月二つので作り物の内に入り扉を締める。

昔、天の岩戸に閉ち籠つて……

ツレ二人出でゝ麗しく謡ふ。

あらふる神々是を歎き……

地も麗しく垂れざる樣謡ひ進み、千早ふると靜める、此より神樂となりツレ二人にて舞ふ。

いかにも御心とるや榊葉の……

神樂濟みてシテは作り物の内より丈夫に太く謡ふ。

面白や……

地も勢ひよく勇ましく麗しく垂れざる樣に謡ふ。

おもて白やと覺えず岩戸を少し開き給へば……

シテは少しく作り物の戸を開くをツレ兩人左右より立より、扉を開きシテの左右の袖を取りて舞臺先迄出で、又珍らしきよりツレは笛座の前に行きて坐しシテは角へ出て左へ開き廻り袖を卷きて右へ廻り止めとなる、全曲通じて此所とて技どころもあらねども、作り物への出入ツレの相舞の神樂、シテとツレとの動作の關係など、能く規矩に合し、彼是の呼吸合してこそ初めて此の能の莊嚴華麗なる趣きを顯し得べきもの、謡としても和吟の麗しき中に莊嚴の模樣を捨てざること最も注意すべき所、容易ならざる能柄なるべし。

小袖曾我

シテ……祐成　子方……時宗　ツレ……母

ツレ……從者　處……相摸

歌舞伎に於て春狂言として曾我を用る所以は、常に大入を占めたる吉例に據れるものなりと聞けり、曾我兄弟の一生の蕾の花の風に吹き散らされたるが如く誰

か同情の涙をそゝがざるものあらん、又獅子の兒の懸崖を攀ぢんとして谿谷に突き落されたるが如く、誰か其の夭折を惜まざるものあらん、孝ならんと欲して孝を盡すに由なく、眼前に時めける讎を見ながら孤力之れを討つ便りなく、僅かに力と賴むべき連理の枝は、慈愛の繩に縛られて容易に合する事能はず、數里の山野を隔てゝ離れて住むも、心は常に相提携し、苦辛慘憺の末共に死を盟つて、年來の思を遂げ、碎けて散りし玉の光りは、千歳の後を照らして、後世萬民の涙の種となる、悲哀の物語世に多しと雖も曾我兄弟に上越すものはあらざるべし、其の歌舞伎狂言の常に同情を惹くも偶然に非ざるなり、而して之れを能樂に作れるもの五あり曰調伏、曰元服、曰夜討、曰禪師、之れに小袖を合して五曾我と言ふ其の順序より言へば小袖は其の中間に位するものにて、多く用ゐらるゝ上より言へば第二位に在りて夜討に次ぐものとならん、元來能樂は模樣を以て演奏の主腦とせるもの、寫實の點に於ては歌舞伎に如くことなし、故に歌舞伎に於て持て囃さるゝ如く、能樂として尊重せらるゝものならね共、其事柄の普く世に知れ渡れる丈け、觀者の迎へて感情を動かす度合も深く、能樂の趣味を解せざる觀客は、反つて此の如き物柄を好む者も多く、小袖に於ては特に相舞と言ふこともあり、可憐なる能、愛らしき能として用らるゝものなり、能樂の制規として之れを演ずる人の年齢の制限嚴格ならざれ共、其の要點愛憐にあれば、青年又は幼年者のものとして適當す、此の能を演ずるに就ては、第一兩人の擧動の一致、第二年齢、第三體格容貌の關係等に注意せざる可らず。

是れを小袖曾我と名くる所以は曾我物語の本文に、訣別に當り母の小袖を請ひ受けて形見としたることあるより名けしものにて、謠曲中に其の事を顯さず、題名に依つて之れを示せるは作者苦心の存する所なるべし。

此能昔時は時宗をシテとし舞も時宗一人にて舞ひしを、中古祐成をシテとし相舞することに改めたるものなりと言ふこと或る書に在り、今の能樂も時經るまゝ

に幾干の改良を施されしものなることと知るべし、此の變化などは改良の實ありしものと言ふべきならんか。

先づ母、面曲見、厚板着流しにて出で脇坐にて床几に掛り、狂言箔の着付に美男鬘せし供女附て出づる。

シテ、時宗共に侍烏帽子、厚板の着付、大口に掛け直垂、多くは鶴の模様あるものを用ゆ、背に矢をさし、弓矢を携ふ、ツレ兩人素袍にて太刀を持ち從ふ、四人次第にて出で舞臺へ二行に並び向合ひて謠ふ。

命をしかの隱れ里。く。富士の裾野を狩らうよ……

優雅の中に雄壯を帶びて謠ひ、地取りにて五郎以下は坐し、シテ正面向く。

是は曾我の十郎祐成にて候……

名乘り終り四人元の如く向き合ひながら謠ふ。

時しも頃は建久四年……

下げ歌上げ歌例の如く、壯中の雅と言ふ心持は常に離れず、たとへば君の御とがめよりツレの方より漸次後見坐に行き、謠一ぱいに三人ともクツログ、後見坐に弓矢を置き、扇を持ちシテは一の松の前、時宗の一の松の後の方へ立ち。

是にしばらく御待ち候へ……

と時宗に對する詞濟て祐成一人舞臺に向ひ案内を乞ふ、狂言出で來りてセリフあり。

シテ「如何に此内へ案内申し候。狂「誰にて御坐候ぞ。や。祐成殿の御參りにて候。シテ「某が參りたる由申候へ。狂「畏つて候。大方殿よりの御諚には。祐成殿の御參りなれば申せ。時宗の御參りならば申しそと仰せ出されて候。シテ「唯某が參りたると申候へ

狂言は母の前に畏りて祐成の來りし由を告げ、母の此方へと申せとの返答を祐成に通じて退く、祐成一人舞臺の中央に來り母の前に拜伏す、母は之れを見て。

母「あらめづらしや十郎殿。いづくへの御序ぞや。母が爲めには態とはよも。シテ「さん候久しく參らず候程に向顏の爲め。又は富士の御狩りと申し候程に。母「さればこそ思ひし事よ君が爲め御狩にいづ

る序ぞや

母は實際を知らず、眞に祐成のみ來れりと思ひ打解けて戯るゝ内に慈愛の情充滿し、祐成は我身に受くる慈愛の恵みの難有さを感ずると共に、弟の心中を推し量りて感慨胸に充つ。

シテ「いつしか親子の御戯れ。めづらし顔にうらやましやと

窃に内の模様を伺ひ見し時宗は、母の不慈を恨みずして我身の不孝を悔い歎く、慈母の恵み、兄の情、弟の殊勝、彼是れの心中を推量れば、誰か一掬の涙をそゝがざるべき、無限の感慨此の一場に溢ると言ふべし。

高間の山のみねの雲。餘所にのみ見てや止みなん

時宗の謡ひ捨てたるに乘じ隙さずかゝりて謡ふ。

同じ子に同じ母そのもりめのと〳〵……

前より引續いて謡ひつゝ打切にて折合ふ、別に靜かと言ふにはあらず、サラリとしたる内に感慨を籠らす、いろ〳〵のおもてなしの所にて狂言立ちて祐成に酌をすることもあり、此謡の切れる迄にシテは立ちて橋掛へ來り時宗に對す。

シテ「日本一の御きげんにて候。あれへ御參りあつて。春日の局をもつて申され候へ。時宗が事は御きげんも如何はかり難く候間。先々參り候まじ。シテ「唯某に御任せあつて急いで御參り候へ

此にてシテと時宗は入り替り、時宗舞臺に入り、シテ柱の前に立ちて謡ふ。

如何に春日の局。時宗が參りたる由夫れ〳〵申し候へ。

右は脇坐を向きて謡ひ、是れより正面へ直しながら。

いつしかもり乳母まで……

出てだに見候はぬぞやとシホル、此所にて憂ひに沈める心持ち、ジリリと折合ふ、更に氣を勵まして。

時宗が參りたる由夫れ〳〵申し候へ

聞きとがめたる心持ちにて次第に氣を込め嚴然とうたふ。

あらふしぎや。祐成は只今來りぬ……

母の言ひ放ちたる鋭き語氣を蹤さず、さも切なき思入れにて。

御ちかことに都やり月を

蹤さず、地は之れを受け、引立ちたる心持の内に無量の感慨を含む、今一目迄スカリと進み、みす几帳にて輕く折合ひ、あら情なの御事やと心を入れてシンミリと鎭る、時宗は一旦ツカ〳〵と進みて止り、後へシザリてシホル、頗る短句なれ共、此間の心持は深く、緩急當を得ざれば其の情を顯す能はず、此所こそ實に見所聞所なれ、何心なき體にて穩かにシテ次を謠ふ。

祐成はかくとも知らで時宗が……

打しほれたる心持にて。

招かれて山のかせぎ

次の地謠の間にシホリながらシホ〳〵として時宗橋掛へ入り來りシテに對す。

泣く〳〵來りたり。打れても親の杖、なつかしければ去りやらず

シッポリと靜かに謠ふ。

シテ「さて御きげんは何と御座候ぞ、時以の外の御機嫌にて。猶重ての御勘當と仰出されて候

此間に於て母は狂言を呼び、時宗が事を申さば祐成共に勘當の由を申聞け、狂言は之れをシテに傳ふ、シテは狂言に向ひて先づ畏つたると申候へと答へ置き、更に時宗に向ひ、十分心に決する所ある心持にて。

シテ「某存ずる子細の候間。此度は同心にて申さうずるにて候。時「いや〳〵某は參り候まじ。

シテ「唯御參り候へ

右應答終り、入代りてシテより先に舞臺に入りシテは中央、時宗は其次へ坐し、母に向ひ拜伏して。

いかに申候。我等が親の敵の事……

前に母の前へ出たる時とは心持を異にし、十分決する所あるを示すべし、但し怒る

心あるにあらねば尊敬の意を忘れざること勿論なり。

總じて祐成なも誠は思ひ給はぬぞや

クリ地の心持は本よりにて伸び〳〵と太く謠ひながらに、至誠を以て母の心を動かす丈けの心持は離れず、之れを受けて地謠はサラリと謠ふ。

たとひ時宗出家の暇を申すとも……

慨むが如く訴ふるが如く聞く人をして覺えず袖をうるほさしめざる可らず。

其れに時宗を法師にならぬとの御勸當

サシなればサラリは勿論なれ共、クドキの心持は離れず。

時宗は箱根に在りししるしに……

曲としての序破急は言ふ迄もなく、男物の能柄サラリとハコビて居着かぬ樣に謠ふべきなれ共、哀訴の心持は常に忘られず。

恨み顏にて兄弟は泣く〳〵立つて出ければ

憎む心より發する恨みにあちず、殘り惜しき心よりのうらみなり、兩人の心中既に一世の永訣を期するもの、如何でか慈母の心の動かざるべき、兩人の泣きに泣きつゝ心殘して立ち行く姿を見て、血を吐く思の母は心も碎け氣も裂けなん、血涙に咽ぶ聲を張り上げて叫ぶ、謠はシットリと。

母は聲を上げあれ止め給へ人々よ

隙さず氣をかけ感慨を込めシックリと謠ひ進む。

不孝をも勘當をも許すぞ〳〵時宗とて

嬉し涙にかきくるゝ有樣にて。

兄弟は嬉しなきに。伏まろべばや

シックリと物憐れに。

見る人も思ひやりて泣き居たりや

母は床几を離れて少しく進み出で、兄弟はシホリながら橋掛りの方へスゴ〳〵と立

ち去りしが許すぞ〳〵にてシホリを止め、振り返りて母の方を見、兄弟は嬉し泣にとツカ〳〵と舞臺の中程迄進み、安坐して更にシホル、母もシザリ坐して共にシホル、舞臺一面の涙のみならず、觀る人聞く人亦共に袖をしぼるなるべし。

更に一陽來復の心持となりて。

祐成申に依つて。時宗が勘當許すにてあるぞ……

祐成も勇み立ちたる氣勢にて。

如何に時宗近う參りて。此年月の御物語り候へ去にても

威よく謠ひ進む中にも何となく涙の離れざるが此所の心持なるべし。

此程時宗が。盡す心に引きかへて……

あまりの嬉しさによりシテ立ちて母と時宗へ酌をする、歌ふ聲と强吟となり更に威を加ふ。

高き名を雲井に上げて富士の根の

雪を巡ぐらす舞のかざし

勇氣凜然精氣天を衝くの概あるべし、此所に母より舞の所望の詞あり、更に雪を巡らす舞のかざしと地謠ひにて男舞となる、此男舞は兩人の相舞にて、其手振り足並の一致こそ實に此全曲中第一の見所なり、如何に發情に巧みなりとも、此相舞の不揃ひとなる時は、此の能は不成功のものと見ざる可らず、而して此一致を保ち得ると否とは、全く平素練習の行屆くと否とに在り、小袖曾我の死活は全く此の相舞に在りと言ふべきか。

舞のかざしの其隙に……

男舞の後を受けたる地謠サラリとハコブこと勿論なれ共、内にこもる兄弟の感慨は、自然に此の謠の中に籠らざる可らず、喜びの中に愁あり、雄壯の内に可憐を含み、うるはしき間に涙のこもれるこそ此の切謠の心持なるべし。

松風

シテ……松風　ツレ……村雨
ワキ……旅僧　處……須磨浦

二百番の謡には各特長ありて趣味を異にする所あれば一概に其の良否を論ず可らざれども、其の大體の構造といひ、景情形の三者配合の鹽梅といひ、恐らく此の松風に上越すものはあらざるべし、併し彼の神、男、女、狂、鬼と五大別しだる上より見る時は、素より女物の内たるに相違なきも、狂の分子も加味されありて純粹なる女物に比しては波瀾に富めり、元來此の謡は須磨の浦の美景に高雅なる戀を加へて謡ひしものにて清秀なる地色の上に所々幽靜と艶麗の模樣を加へて益々其の美を顯せる如き觀あり。

囃子方坐着て後、丸き臺に松の枝を附けたる作り物を正面に出し、然る後ワキの出に付ては上掛りと下掛りとに依りて二樣の別あり、即ち上掛りには次第なくして、直に名宣となれども、下掛りには次第ありて名宣となり、此の次第の謡方に就て面白き逸話あれば左に記すべし、今より五十年餘り前の事ならんが、脇實生の弟子にて建部四郎兵衞といへる人あり、或る諸侯の御催能にて松風の脇を勤むることゝなり、身に取りては名譽の役當故、念の上にも念を入れ、師に就て敎へを受けしに次第の「須磨や明石」のやよりあかしへ續く所の謡方惡しき爲め、「ヤアカシ」と聞ゆるとて謡返さるゝ事幾十回に及べども未だ容易に首肯せられず餘り殘念さに一週間毎日藏の内に籠り、幾回となく此の次第の謡ひ方を練習して遂に聲を枯すに至れり、愈々當日となりて舞臺に上りしに、聲を謡潰せし爲め艶麗の趣きは損じたれども其の練習の効空しからずして、唯三句の次第に聽く人皆感に堪へ之れが爲め建部の名は大いに揚りしといふ。

右は唯一つの話に過ぎざれ共、脇方に取りては此の次第一つを如何に大切にす

るかを窺ふに足るべく又松風の能の如何に能樂師社會に重んぜらるゝかも察せらるべし。

此ワキは行衞も知らぬ一人の旅僧に過ぎざれ共松風といふ能の位に伴れてシックリと品位よく謠ふ。

須磨や明石の浦づたひ、〳〵、月諸共に出うよ　同「是れは諸國一見の僧にて候……

又是れなる磯邊を見ればと作物を見て謠ひ此邊りの人に尋ねばやと思ひ候、とよりシテ柱の方に來り狂言方の所の者を呼出して、松に付ての問對あり、作り物の前へ返し來り、篤と作り物を見込みて、シッポリと左の通り謠ふ。

扨は此松は松風村雨とて……

讀經の文句こそ無けれ、過し昔を偲び業平、松風、村雨の跡を吊ふ心なれば、此の謠によりて、何か出て來ねばならぬ樣なる感じを起さしめざる可らず、ワキに取りては緊要なる謠場所なり氣を替へハッキリと左の詞をうたふ。

かやうに經念佛して吊ひ候へば……

ワキの謠濟みて愛らしき潮汲車の小き作り物を出し正面の松の作り物の右の方へ置く。

眞の一聲にてツレを先に立てゝシテ出づる、シテツレ共に同じ裝ひにて面小面、鬘、同帶、箔の着付に箔の腰卷、腰帶をしめ、上に白き水衣を被りて肩を上げ、扇を持つ、ツレは一の松の所シテは三の松の邊りへ立ち向き合ひ靜め頭にて篤と鎭りし位につれ、シックリと靜かに連吟にて謠ひ出す。

汐汲車わづかなる、浮世に廻るはかなさよ

正面を受けツレは破の位を以て一段浮立ち謠ふ。

波、こゝもとや須磨の浦

又向き合ひ、シックリと乘り合ひて次の句を連吟す。

月さへぬらす袂かな

右謡終り大小のアシラヒに伴れて舞臺に入り、下掛りは次第よりサシとなり、上掛りは次第なく直にサシとなる、サシのサラリと滯らざるは其の本體なれば此所亦サラリには相違なきも、秋の夕暮に昔を思ひ出ての述懷なれば何となく浮き立たぬ趣きを含みて滯らぬ樣に謡ひ連吟となれば向き合となる。

心靈しの秋風に海は少し遠けれども……

思を乾さぬ心かな、とシツポリと地へ渡し地はシツクリと受け、沈みたる内に滯らぬ樣にうたふ。

かくばかり經がたく見ゆる世の中に……

シテは此地謡より正面に向ひ出潮をいざやとツレと向き合ふ。

打切にて位を定め氣を換へ伸々と。

影恥かしき我姿……

此の地謡の間にシテは跡に殘れる溜り水と溜水を見る形あり野中の草のより正面を向きたる内にも何となく趣きあり海士の捨草よりツレと向き合ひ兩人共シホル此所は汐を汲まんとて立寄り水に寫る影を見て懷舊の涙に暮れ身のはかなきをなげく段なれば其心して見るべきなり此所よりツレと入り代りてシテは常座に立ち氣を替へて浮きやかにサラリと謡ふ、此所全く風景の美に心移りて憂を忘れたるなり。

面白や馴れても須磨の夕ま暮……

連吟の所より双方向き合ひてシツクリと折れ合、更に氣を換へ、さらば是れより汐汲みに掛らんかと襷がけでもしたる心持ちにて列立ちて麗しく。

いざ〳〵汐を汲まんとて……

双方一句宛謡ひ進み威ひよく地へ渡し、地も隙さず受け氣を掛けて謡ふ恰も波浪の勢ひよく磯邊に打寄せ碎け散りて返るかの如く曲中第一に波瀾のある所にて注意すべき要所なり。

寄せては返す片思……

返しの裾のゆきより心して「蘆邊の田鶴」と靜まり、シテは返しより前の右手へ進み田鶴こそ、と鶴の起ちて飛ぶを見る形あり、四方の嵐、と又正面の方へ心付けして、嵐の吹き渡る趣きを見せ、夜寒さこそと、面を下げて吹く風の身に沁みる心持を顯し、更け行月、といよ〳〵シックリとして月を見、汲むは、と車に目を付け、燒く汐煙り、と車の側へ寄りて坐し扇を開き汐を汲入るゝ仕方をなす　波瀾あり、變化あり、風景を見せ、心持を寫し、汐を汲むてふ特殊の形もあり、景情兼ね備りたる見所聞所なり、次のロンギを引立す爲め其前に下歌あり、シックリと靜かに謠ふ。

松島や小島の蜑女の月をだに……

シテ此間に車に付けし紐を持ちて立ちて元の坐へ行きロンギに正面向く。

此のロンギは汐を汲むといふことに餘情を添ふる爲め、多くの名所を寄せて謠ふなり、即ち汐汲みといふことを美化したるものにて、松風の灘越しなどいふ聲自慢連の得意に謠ふ個所もある謠所聞所なり。

運ぶは遠さ陸奥の其名や千賀の鹽竈……

見れば月こそ、といふ所にて車に載せてある桶の内を見、影は二つと海を見る形もあれば、流義によりてはツレ一つの桶を持つて出でゝ此の車の上へ載せて桶を並べ、シテは此の二つの桶の内を見て影は二つをきかすもあり、此所はシテの力次第にては如何樣にも面白き形の出來べき個所なり。

みつ汐の、の邊りよりシテは綱を持ちて小鼓方の前の方へ行き、鹽路かな、と留拍子踏み綱を捨て常の座に行きて腰桶にかゝる。

ワキの案内あり、ツレの取次ぐ等は例の通りなるが、シテ暫くとツレの斷り切るを制し止めてよりの謠には大に餘情の籠る所にて、ワキの敢て宿を乞ふ内に出家の事にて候へば、といふ時に於て既に思入れあるなり、此邊の心入れは觀る人の大に注意すべき所なり。

ワキの座に就き問はず語の内、逆緣ながら吊ひて通りてこそ候へ、といふ時シテツレ

共にシオリ、ワキは之れを見て不審するに付て、遂に思ひは穂に出でゝ伸々と謠ふ内にも何となく思ひの籠りて。

實にや思ひ内にあれば色外に顯れ候ふぞや……

僧の追究によりて此度はいよ〳〵包み切れずして其の名を名のる丈けは内に籠る思ひ薄くハッキリと伸々と張りて謠ふ、但松風固有の位は忘れられず。

恥かしや申さんとすればわくらはに……

此上は、よりはクドキの名乘りにてシッポリなれども個樣の場所は謠のダレヌといふが第一の心掛けなり、連吟ともなり又一人宛ともなり、シットリと地へ渡し地はシックリ受けて靜かに謠ひ次に來るべき狂瀾の伏線とす。

松風も村雨も袖のみぬれてよしなやな……

打切にて氣を換へうるはしく引立ちて謠ふ。

樂草の露も思ひて亂れつゝ……

此に一波瀾を起して狂ひ模樣を示し「哀れに消えし憂身なり」とシックリと鎭る、但本統に据ゑるにはあらず、直にシッポリとクセに移る。

あはれいにしへを、思ひ出づればなつかしや……

シッポリながら滯らぬ樣にハコビて謠ふはクセに就ての一大注意なり。

此のクセの内に後見人風折と長絹を持ち出でてシテの左の手へ持たせ、文句に合せてシテは此品を見て懷舊の涙に暮るゝことありて上げとなりシテは戀慕の心を持ちて伸々とうたふ。

よひ〳〵に脫ぎて我ぬるかり衣

地も隙さず受けうるはしく謠ふ。

かけてぞ頼む同じ世に、住むかひあらばこそ……

同じ世、といふ邊よりシテは起ちて出で、忘れ形見も、と風折を見、捨てゝも、と左へ捨る樣にし、取れば面影、と長絹をいだきて見込み、起臥、より右へ廻り、あと

より戀の、と振り返り見、せん方涙、と後へシザリ安坐して泣く、此所曲中樞要の技所なれ共、一歩を誤れば或は卑穢の感を惹く恐れあり注意を要する所なり。

是れより物着となりて長絹風折を着し、アシラヒの末の靜かなる乞合につれて、シツポリと靜かに謠ひ出す。

三瀬川絶えぬ涙のうきせにも……

改まりし大鼓のコイ合の掛聲につれて立ち上り松を見氣を換へハツキリと張りて謠ふ。

あら嬉しやあの松陰に……

いで參らう、と作り物の方へ進み寄らんとするをツレは走り出て之れを制しサラリと謠ふ。

あら淺ましや其の御心故にこそ……

共にサラリの中にもシテは自からシテの位ありツレはツレ丈けの位を持し双方謠ひ進みて勢ひよく地へ渡し、地は追かけ受けて伸びやかに麗はしくうたふにつれシテとツレはシホリながら双方入れ代りツレは笛の上座に坐し、シテ橋掛りに行きイロエになりて舞に入り破がゝりの舞となる。

舞終り稻葉の山と謠ひながら上羽となる。

松とし聞かばと地に移りてシテは左右をしながら右へ乘り込み、其れは稻葉の遠山松、とシックリおちつきて謠ひながら遠く松を見る形をなし、是はなつかし君こゝに、より次第に謠の位の進むにつれ舞臺を角取り廻り松の行平とキット松を見込みながら廻り、いざ立寄りと前へ出で、そなれ松、と左右の袖を松へ打掛け、なつかしやとシホリて退り破の舞となる、此所松を行平と見戀慕に狂ふ熱情の極を示せるものにて、古歌にからみて美化したる作者の働をば大に味ふべき所なり、破の舞の内には扇をかざして松の周圍を廻る形などあり、松にあこがれまつはるゝ狀態美しくも亦あはれなり。

破の舞ひ上げ熱狂は既に去り須磨の浦の美景に立戻りし心にて麗はしく謠ひ出す。

松に吹き來る風も狂じて……

シテは松に吹き來ると松を見、須磨の高浪より文句に合せ數々の形あり結局袖をかざし松を見て留拍子を踏み終曲となる。

高野物狂

シテ……高師四郎子……春滿丸

ワキ……僧　處……高野山

男物狂の一つにして、亡き主君より托されし孤兒の逃世せるを尋ねて高野山に登り、遂に巡り遭へるといふ作曲なり、常陸國筑波の里に、果して平松何某といへる豪族のありしや否や、櫻川の舊跡を尋ねし時、問ひ試みたれ共便りを得ざりし、其の事蹟の有無は兎も角も、高師四郎といへる陪臣の、托孤の信認に背かず、能く君臣の義を重んじ、刻苦して逃世せし幼主を尋ね出せし心情は、最も掬すべき美談にして確かに觀者の同情を引くに足るべき事柄なれ共、其のシテ役たる人の身分、及び其の事柄より推測すれば、別段重々しき能柄にあらず、然るに實際此の曲を演ずる上より見れば、中心森嚴の趣きありて輕々しからず、是れ全く高野山の實景より來る感想にして、人格又は事蹟の上より起れるものにあらず、要するに此曲は高野山てふ靈場を其主腦とし、尋ね登る狀況を其副飾とし、玉章を以て其趣きを添へたるものと言ふべきならん、流義によりては、子方を僧とせず、巡り遇て後伴ひて鄕里へ歸ることゝせるあり、是れ必ず後世の改作ならん、高野山を主としての作曲としては、共に佛門に入るこそ自然なれ。

囃子方坐着きてシテ先づ出づる、シテは直面、厚板、素袍上下を着、短刀をさし、扇、水晶珠數を持つもあり、又段熨斗目、大口、掛素袍を着するもあり、又時としてはクワラを掛るもあり、舞臺に入り沈着に品位よく名乘る。

是れは常陸國平松殿の御内に、高師の四郎と申者にて候……

名乘り終り舞臺の正面に坐し合掌し、念誦の心持にて殊勝に伸々と。

ありがたや　昔在靈山名法華……

實難有き悲願かなにて手を下し、シッポリと靜かに次を謠ふ、祈念の心持なり、流義によりては地にて謠ふもあり。

慈眼視衆生　こと〳〵く……

此の謠の終りより立ちて歸らんとする所へ、狂言方文を持ち來り、春滿殿よりの文なりとて渡す、さも不審しき心持にて輕く。

荒思ひよらずや先御文を見うずるにて候……

文を受取り正面向き更に坐して文を開き、伸々と讀む、内に心配と愁の氣を含むこと勿論なり、タレず、焦かず、身に染々として、聞く人を退屈せしめざる事、個樣の讀物に就ての要點なり、此の文の讀方にて、此シテの成功不成功を知るに足る、此の讀み方の拙き人にては、既に此のシテの務まらざることを證明するものなり。

夫れ受け難き人身を受け……

文の終りにてジックリと折合ひ、心持を替へて詠歌を讀む、詠歌の如き節數多き場所は、居付かざる心掛け肝要なれば、調子は下げて氣を引立て、ダレザル樣に輕く謠ふ。

墨衣思ひ立てどもさすが世を……

更に氣を替へ地はシッポリとメラざる樣に謠ふ。

書置給ふ言の葉の……

此の下歌につれてシテは文を下げてシホル。

打切にて氣を替へ引立ちて謠ふ、但し内に憂ひの色は十分籠る。

恨めしの御事や……

返しにて文を疊みて左の手へ持ち、たとひ世を捨てと立ち、何所迄もと遙に彼方を

思ひやる心持にて右の方を見、今は散り行くより正面向き、行衛はそことより少しく出て開き、シホリて中入となる、此前半さしたる技とてもあらぬ共、忠臣の心中千萬無量の思を寫すべき所、老功者にて始めて演奏し得べき物柄なり。

松の立木の作り物を出すもあり又出さゝる流義もありワキと子方次第にて出づる、ワキは通常白衣の僧、子方も角帽子のしめ、水衣、腰帶の僧形、珠數と扇を持つ、子方を僧とせざる流義にては、唐織に長袴を着せたる兒姿となす、共に舞臺に入り次第を謠ふ、位通常。

昨日重し花の袖……

地取りにてワキ正面向き名乘る事常の如し、名乘り終りて脇坐に並び坐す。

一聲にてシテ出る、着付は前同樣厚板又は段のしめにて、大口を穿き水衣の肩を取る、扇をさし、笹に文を附けたるを持ち、橋掛りに立ちて伸々とサラリ謠ふ。

舞臺にかく玉章と見ゆるかな……

陸奥紙に書き送ると、笹に附けたる文を見、あら覺束なの御行衛やなと謠ひながら舞臺に入る、文句に付ての心持あり、ジリ、ツと折合ふ。

呼子鳥と謠ひつゝ足拍子を踏みカケリになる、カケリ常の如く、狂ひ物の趣きを顯す、カケリ濟み、ノリて伸び〳〵と浮きやかに謠ふ。

誘れし花の行衛を尋ねつゝ……

地はスカサズ受けて勢ひよく伸々と浮きやかに。

風狂じたる心かな……

シテは足拍子を踏み右へ乘りながら笹を兩手に持ちて地にクツツキて伸々と謠ふ。

かたみに持てる此の文を

地はいよ〳〵勢を拔かさず、シテの謠と切れぬ樣浮きやかに謠ふ、シテは左へ廻りつゝ手を笹より放しひらきて立つ此所にて一段落つく。

懷紙と人や見ん

大小の打上げて打切りし後のヤの聲に當り、氣をかへて、輕く浮きやかに謠ひ出す、此所道行と述懷を兼ねたる所、進まんとして進む能はず、沈まんとして沈む能はず、シツポリとして滯らず、ザクリとして輕々しからず、大に注意を要する謠所なり。

朝もよひ紀の關越えて名に聞し

右の一章分れて三段となる。第一は朝もよひよりいざや狂ひ上らんまでにて、前項に述ぶる如く、道行と述懷を兼ね、ザクリとしたる內に何となく思ひあり、第二は立登る雲路のより狂ひ覺る心のまでにて、高野山に登り其實況にうたれて心も自から澄渡る所、シツポリと靜肅に、第三はいつか扨より立よりて休まんまでにて、主君を尋ぬる熱情の發動する場合、自から氣上り心熱し乘りて謠ふ、形としても、我方と幕の方を見て故郷を思ふ心持、鳧鐘念佛の聲を聞て心の自から澄渡る模樣、主君を思ふて佛を念ずる熱誠の發顯等大に注意して見るべき個所少なからず、此一曲中にても心を留むべき謠所技所なり。

次のワキ、シテの問答に至る順序に付流義により二樣の區別あり、一つは子方先づ物狂の我乳人なるを知り、僧に向つて此の物狂の乳人なるを語り、僧は其の目出度事なり直に名乘れよと奬むるを、子方は思ふ子細のあれば、先づ知らぬ裝ひして詞をかけよと云ひ、僧は其意を了して詞を交すことゝし、又一つは、子方は此際何事も言はず、僧獨り異樣なる人物こそ來れりとて詞を掛る事とす、二者何れにしても演奏の上に差したる關係なしと雖も、作意としては子方の先づ乳人たるを知るは餘りに底を割り過ぎて面白からず、僧の何氣なく唯異形の人體と怪しみて詞を掛くる方自然なり、兎も角僧は其の異形を不審みて問ひ掛くる心持なり。

不思議やな是なるは物狂にて有げに候……

シテは沈着なる態度にて反つて僧の詞を詰る。

是れは御利益とも覺えぬ仰かな……

入定といふ詞は高野山にては輕々しく口外すべからざる所、僧は嚴格に聞咎む。

入定れる高野の山とは……

一度は其の言の餘り露骨なるかを心付きしも、之れを種として更に進んで僧の我を咎むる事の筋なきを述ぶ。

實に入定といふ詞は……

僧は屈せず又更に其意思の疑しきを質す。

扨はおことは人を尊れず……

形は狂人なれ共心は狂せず、言ふ所事理益々明白なり。

いや尊る主君も捨入なれば……

僧は更に其形の其意思に伴はざるを詰問す。

左樣に出家の望みならば……

即問即答意氣益々昂る。

いや姿を改めぬこそ……

心にくき狂人の詞、僧は法理を說いて其の答を俟つ。

發心初緣の形ならば……

既に心に會得せる所、當山祖師の實際に當てゝ說破す。

事新しき仰かな……

以上互ひに論難攻擊、寸分も心に撓みなく、次第に呼吸も詰みて押し進みしが、此に於て僧は此の物狂の尋常人にあらざるを知り、心解けて其共に語るに足るべきを思ふ。

おゝ殊勝なり實も大師は……

狂人亦僧の心の解けしを見て、己れも論難の心を去り、當山の難有を感じ、深く賴む所ありて登山せし由を云ふ。

入定れる高野の奥……

問答は何時か變じて、共に大師の恩德を觀念す、前の問答の時とは大に心持を異に

して、連吟にて穏かに地に渡す。

昔薩埵の印妙を授かり……

地は静かに受けて伸び〳〵と品位よく謡ひをさむ、是れ問答によりて激せし意氣を静め、謹んで高野山の由來實景を叙するに至れる段取りとす。

大師の待ち給ふは……

心愈々改まり静かに高野山の位置を叙す、何所迄も太く伸び〳〵と高尚に、

抑此高野山と申は……

本ゆりにて落せる調子につれ、位は静かに、ハコビはサラリと。

然れば末世の印所として……

地は滞らざる樣品位よく。

中にも此の三鈷の松は……

謡はサラリとして心自から鎮る、身は何時しか森々たる靈山中に在るの思ひして

クセに移る、打切にて篤と鎮りて謡ひ出す。

さればにや眞如平等の松風は八葉の峰を閑に吹渡り……

文句柄に對しても静かに謡ふ外はあらず、殊にしん〳〵たる奥の院の邊り、心澄み氣鎮りて既に俗世界を忘れたるものなり、謡としてクセ全體は序破急の常規に外れず、技として曲舞常の如くなれ共、文句に合せて心持容易ならざる所あり、目にて見ず、耳に聞かず、心に於て之れを見聞すべき場所柄ならん。

曲の上げより氣を張り伸々と乗りて謡ふは通常の規定なれ共、此のクセは殊更に其心持明かにして其位静かといへども、男舞に移る丈けの準備は、自から此のクセの内よりありと知るべし。

張り上げて伸び〳〵と舞の掛りとなる。

尋ねこし

舞は静かなる男舞なり、靈山の神氣に襲して澄み渡りし心も、未だ廻り會はざる主

君の行衛を　ひ出でては、心再び逆上せざるを得ず、舞ひ狂ひ、謡ひ狂ひて、山中を尋ね廻る。

浮きやかに伸び〳〵と、
尋來し霞の奥の高野山

地は靜に受けて居付ぬ樣に輕く、
時しも春の

シテは氣を掛けて太く、
花壇場

地はすかさず受け、次第に位を進め、氣を高め、此に一波瀾を起す。
花壇場月傳法院……

爰に一頓挫を來し大に覺る所あるもの、如く、位は靜まれ共尙狂態を脫せず。
高野の內にては……

此所謠としても緩急波瀾あり、技としても月雪花紅葉等の名所を指摘して、山內の實景を寫す、一曲中の活動場所として見所聞所なり。

子方は無邪氣に此の物狂の乳人なる事を僧に告ぐ。

いかに申すべき事の候……

（前に乳人たるを知り脇をして知らぬ振りにて問はしめたる流義にては子方よりシテを呼び掛くること、なす）

シテは稚聲を聞きて主君たるを知り、嬉しき內にも恨を含める心持にて、

不思議や今のをさな聲は

僧は驚きながら其實否を確めんとて、

それは不思議の機緣かな……

何となく心も勇める心持にて二人。

常陸の國筑波の何某……

問答の意味にて勇ましく地へ渡す、地も威勢よく受け引立ちて浮きやかに、

三世の契り朽せねば……

去れども兼て期したる身の、共に佛門に入りては清淨界に入る心地して裕りと、

本より誠の狂氣ならず……

少しもタルミなく引立ちて靜かに其曲を結ぶ。

佛門に入らず共に故郷に歸りて行末繁昌せりとの方に作れる流義にては、心改まり清淨界に入るの變化なく、先はめで度〳〵の格にて勇ましく謠ひ治むるこそ適當なれ。

此曲にして果して高野山を叙するを主として作れるものとせば、めで度し〳〵にて局を結びては其首尾全からず、末尾一變化あり清淨界の人となりて其局を結ぶを以て最も能く其體を具へたる者と見るべきならんか。

殺生石

前シテ……里女　後シテ……狐ノ精

ワキ……源翁　處……下野

玉藻前の物語、源翁禪師の傳記等に依りて作りたるものなるべし、前シテは美人の姿なれ共、月雪花の飾りもなく、茫漠たる原野中の怪石を配したる丈けなれば、色もなく香もなし、され共安達原の如く、物凄くして陰氣なるものにあらず、唯ならず凄まじき中に何となく陽氣籠りて雄壯の模樣を含む、是れ能柄として位の重くれざる所以にして、重なる點は、演者其人の體の動かし方にあるべし、番組の位置としても、脇能に用ゐらるゝことあれば、切に使用さるゝことあり、廣く言へば三番目を除く外は何所へなりとも用ゐるを得べき格別のものなり、働きものとして見るべき能柄ならん。

囃子方坐着けば、臺の上に緞子に包み二つに割るゝ如く作れる石の作り物を出す、流義により替の形としては、作り物を出さず、幕内へ中入りし、後仕手は熨斗目を被りて出ることもあり。

ワキは角帽子を沙門に着、小格子厚板、大口、水衣、掛羅をかけ、珠數と扇を持ち、狂言方能力に錫杖を擔がせて出で、舞臺に入り次第を謠ふ、普通の脇僧よりは幾干か威嚴あり、シッカリと謠ふ。

心なさそふ雲水の、〳〵、浮世の旅に出ふよ

地取りにて正面へ直し、堂々と名乘る。

是は源翁といへる道人なり……

ドッシリ伸々と道行をうたふ。

雲水の身はいづくとも定めなき……

脇は道行を終り太鼓坐の前の所に立ち、那須野の原に着きたる由を謠ひ脇坐の方へ行くと、狂言は出でゝ作り物の上を見、落つるは〳〵とて頻りに石の上に鳥の落るをいぶかることあり、脇は之れを聞とがめてセリフあり、立越え見んとて石の方へ向ふ時、呼び掛けてシテ出づる。

シテは增、小面、孫次郎等の面にて若き女の姿、鬘、同帶、箔の着付、唐織の着流しにて扇を持つ、裝束も艶麗なるは似合しからず、底いたりせるもの良し、金地に尾花に蝶の模樣などあるものなれば妙ならん。

優美なる內に何となく物凄き氣を含みて呼び掛くる。

なう其石の邊りへな立寄らせ給ひそ

ワキはシテに位を讓りサラリと丈夫に。

そも此の石の傍りへよるまじき謂の候か

呼掛けの時程物凄き心を含ます。

其れは那須野の殺生石とて……

節になる所より正面を受けやさしく。

かく恐ろしき殺生石とも……

キッパリと氣を換へて。

そこ立退きたまへ

問答常の如く吟の變じて和となる丈けは心持も柔かく、靜に地へ渡す、地は沈着に受取りてシッポリと謠ふ、此所此一曲中最も靜に穩かなる所にて、可愛らしき中に物凄き模樣を顯すべし。

奈須野の原に立つ石の……

シテは例の通り出でゝ開き廻る位の所なれ共、物すさまじきと心持ありて西の方を見、物凄き秋の夕かなと開く當りに自然趣きあり、ワキは地謠の終りに掛けて威ひよく詞を發す。

猶々玉藻の前の謂懇に御物語候へ

シテは此詞を聞いて坐し、地は威ひよく乘りて丈夫に謠ひ出す。

抑此玉藻の前と申は……

本ゆりにてをさまり、氣を換へ丈夫にサラリと謠ふ、然れども女姿といふことは忘れられず。

然れば好色を事として……

地は丈夫にサラリ。

帝の叡慮淺からず

シテは幾千か位を附けて、然し此所は地と餘り懸隔なき樣心掛くべし。

或時玉藻の前が智惠を量り給ふに

地はサラリと謠ふ、シテへ渡す所にて少しく心する。

一字滯ることなく……

此所のシテの謠にて曲に掛る準備を整ふるもの故其心して地へ渡す。

心底曇り無ければとて

地はシテの心持を受けて取り、ジリ、と折合ふて曲に移る。

玉藻前とぞ召れける

打切にて位を定め丈夫に居付ぬ樣曲を謠ひ出す、此クセなどは、最も能く序破急の區別を立つることを得、即ち或時帝はより、御殿のともし消にけり迄は序の段にて、此所に打切あり、此所より破の段となる、上げは破急の界にて、上げの後より急の段となる。然れ共序破急各段の内文句に合せて夫れ〴〵心持は捨てられず、雲の景色凄じくとか、雲の上人立騒ぎとか、叡慮も代り忽ちにとかの邊り、所謂文句を謠ふといふ心得あるべし、此クセは此一曲中謠としての聞所なるべし、技としては何事もなし、唯例のアシラヒあるのみ。

或時帝は清涼殿に御出あり……

ワキはすかさず問ひ掛る。

扨々個樣に委しく語り給ふ……

シテはドッシリと將に本體を顯さんとの意氣込み。

今は何をか包むべき……

ワキは諭す心持にて。

實や餘りの惡念は……

既に本體を名乘りても、流石に女姿丈けの趣きは捨られず。

あら恥しや我姿

キッパリと丈夫に。

畫は淺間の夕煙の……

大鼓の頭にてキッパリと威ひを付け、丈夫に鋭く。

立歸り夜になりて……

シテはざんげの姿とワキへ向ひ、立ち掛りて夕闇の夜の空と扇を開きてかざして上

を見、（唯見る計りもあり）立ち廻り、我影なりと思召しとワキへ卷指して開き右廻り開きて石の中へ中入となる、僅かの所なれど、シテの技所なり注意して見るべし。

中入の間、ワキと狂言との間にセリフあり、狂言方の能力は玉藻前の物語をなす、シテは此間に裝束を改む、面小飛手、赤頭、色鉢卷、厚板、法被、半切、腰帶、扇にて作り物の内にて床机に掛る。

ワキは狂言より錫杖を受取り、之れを突き立て持ちて作り物の前へ進み、太く丈夫に謠ひ出す。

木石心なしとは申せども……

此ワキの謠の内詞と喝の區別あり、汝元來よりは喝なれば、謠方にも其心持あり。

出羽一段にてコイ合聞て謠ひ出す、丈夫に伸々と、此謠の風は大虛にと移る所、太鼓に一定の手配りあり、其寸法に遵つて謠はざる可らず、何んでも無き所にて、兎角シテの穴を明くる場所なり。

石に綉あり水に音あり、風は大虛にあたる

此シテの謠の終りに太鼓の頭あり、其の位に連れ、威ひよく地はうたひ、作り物割れてシテの姿顯る。

形を今ぞ顯す石の……

ワキはすかさず突込みたる意氣込にて。

不思議やな此石二つに割れ……

シテは大きく丈夫に名乘る。

今は何をか包むべき……

詞の所よりはサラリと丈夫に。

我王法を傾けんと……

地はコケヌ樣サラリと丈夫に謠ひ進む丈けにて別段の事なし、技は是れに反し、此切りこそ肝腎にて、此能のシテの働きは一に唯此の切の形にあり、幣帛をおつ取り飛

ぶ空と、臺より飛下りてより、此野に隠れすむと臥す所、草を分つてと草をかき分る形をする所、追つまくつゝと追ひ廻す所、射伏せられてと伏す所等流義により、幾干宛かの差あれども、何れも離れたる形のある所にて、腕達者なるシテ方の、大に其手腕を示すべき場所なり、此の能の見所は確に此切の一段にあり。

國栖

前シテ……老翁　ツレ……嫗　後シテ……藏王權現
後ツレ……天女　子方……王　ワキ……官人
ツレ……輿カキ　處……大和

此能を見るには之れを二大別して見る必要あり、前半中入迄の間は景情兼備はり役々の心持に於て大に注目すべき點少なからざるが、中入後となりては大に見様を異にし唯だシテ及ツレの態度即ち姿勢の美といふことを見すること其の主要點なり。

前にシテの出に於て既に一種異例を示す先づ船に乘り突然と「姥やたまへ」と謠ひ出す迄に我が家の上に紫雲を認むる所に大に注目すべき形あり、此謠ぶりも亦大に聞べきものあり、船さし寄せて我家に行きと水棹に手を掛けて船を漕ぎ寄する趣きから、思ひ掛けなく貴顯の居らるゝに驚きて尊敬の意を示す邊りには無限の味ひあり、供御をそなふる所も見外す可らざる所、供御の殘りを下されて、其の魚を吉野川へ放つ仕舞は前半中シテの第一の技所にて短き仕舞なれ共一種風變りの形にて頗る掬すべき趣味あり、其のあとへ俄に追手のかゝる變化も面白く、間狂言との問答は最も聞く可き所、其の老翁の威ひに懼れて逃げ去る追手を見送り、氣を換へて「のう聞し召せ」と翁媼の船を引起す所は勇ましき内に言ふ可らざる憐さを感じて自から我が神國の尊さを想ひ起さしむ、其れより打ち靜りて君臣の感慨を叙する所は幽谷に松風を聞くの思ひあり。夜の更るに隨つて靈氣愈々

加はり神々しき幽靜の有樣何時しか身は神仙の境に入れるかの感あらしむ、澁味の内に數々變化ある趣きを示すは老巧者の手腕にあらざれば能はざる所ならん。

囃子方の座定りて後、一聲にて王を輿に乘せ、ワキ後に從ひ出づる、王は子方にて初冠、箔、長絹、大口、腰帶、扇、ワキは厚板、大口、法被、腰帶、扇にて太刀をはき、輿かき二人厚板、大口にて、舞臺に入り王を眞中に立たしめて、輿をかき之れを挿み、ワキは後に立ち、何れも正面向きて伸々と丈夫に一聲を謠ふ、丈夫なる内にも落武者の事なれば勇ましきといふにはあらず、高貴護衞人の品格も忘るべからず。

思はずも雲井を出づる春の夜の……

シッカリと滯らざる樣に。

神風や五十鈴の古き末を受くる……

ワキも一段位をザクリッと謠ふべきなれ共、何となく敵に追はれ落ち行く心持は離れず。

此君と申すに御讓として……

普通下歌はシッポリの心持なれ共此の下げ歌は勇ましといふ心持の無き丈け更にシンミリと謠ふ、併し垂れてはならず。

身を秋山や世の中の宇陀の御狩場よそに見て……

上歌より和吟となる丈け氣を替へ伸々と浮きやかに謠ふ、但し嬉しき心持にはあらず。

男兒伏すなる春日山……

着ゼリフ濟て王は脇座に行き、輿かきは地謠の前に座し、輿かきは切戸より入る。

先づ緞子にて包みたる船を後見人持ち出でシテ柱の前より少しく角かけて置き、ツレを先きに立てシテ出で、姥は前へ尉は後へ乘り、後見人はシテに棹を持たす。

シテは尉髮、面、三光尉、熨斗目、水衣肩あげ、腰帶、ツレ面姥、姥かづら、箔の着附、厚板の上衣、水衣肩上げ、釣棹をかたげ出づる。

シテは舟に乗り棹を持つと共に脇座の上を見て朴訥にうたひながらツレへ向く。

蚊やみたまへ

ツレは何心なくシテの方へ向きながら答ふ。

何事にて候ぞ

此邊り流義により多少文句に相違あれ共、伏屋の上に紫雲棚引といふは同じことにて、脇坐の上を見、聯吟となりては互ひに向き合ひて謠ふ。

昔より天子の御坐所にこそ……

シテは脇坐の方を向きながら若しやと疑ふ心持にて謠ふ。

もしも不思議に尉が住家に

ツレも脇坐の方へ向きながらサラリと。

左樣の貴人やおはすらんと

シテはシツトリと謠ひながら棹へ手をかける。

舟さし寄せて我屋に行き……

ツレは王を見てサラリと。

見れば不思議やさればこそ

シテは大きく。

玉の冠直衣の袖

ツレはやさしくサラリ。

露霜にしなれ給へども

シテは氣を掛けて威ひよく地へ渡す。

さすがまぎれぬ雀鞋ひ

地はすかさず受け氣を掛けて太く滯らざる樣にうたふ。

さも淨見原の天子とは……

文句に合せ釣棹及び船棹を捨てシテより先づ船を出で常の座に坐して王の方を恭く

しく見、ツレも續いて下りシテより右の方少し下りて坐し是れ亦王を見て居る、シテの出より此邊迄の所、他に類の無き謠ぶり、形ぶりにて、謠の心持多く緩急抑揚も少なからず、朴訥なる漁翁の如くにして、何となく尋常人ならぬ赴きを見す、最も注意して聞くべき一要所なり。

シテはワキに向ひ。

是はそも何と申たる御事にて候ぞ

此邊の問答別段變りたることなし、然れ共是れ此の一曲中の技所たる鮎の段を產み出す伏線なれば、今の平易は將に來らんとする波瀾の元なることを忘る可からず。

普通の問答終り、氣を替へ勇ましくサラリと浮き立ちて。

姥は餘りの忝なさに……

シテも同じく氣を引立てながらシッカリと謠ひ勇ましく地へ渡す。

祖父も今日釣りたる魚の……

地も潔よく受け浮きやかに太くうたふ。

吉野の國栖といふことも……

此間にシテはワキへワキは王に供御を奉る形あり、間近く參れとワキはシテに向ひ坐し、次の詞をうたふ。

いかに尉御供御の殘りを尉に賜るとの御事にて候

シテは受け、恐懼の心持にて。

あら有難や候……

問答常の如し、「國栖魚のしるしにて候へ」と謠ひ終りてワキを外し、ワキは元の坐に復し、シテはツレに向ふ。此邊總て扇を開き兩手にて持ち、魚を盛りたる樣を見する。

いざ此魚をと太く謠ひながらキット前を見る、此前に谷川の流れあるものと想像せざる可らず。

ツレは制する如き口調にて。

筋なき事な宣ひそ……

シテは語りの心持にて、焦かず、滯らず謡ひ進み「此魚もなどか生ざらんと」と扇子の上を見込みながら、威ひよく地へ渡す。

地は鋭く受け威ひよく謡ふ。

岩ぎる水に放せば……

シテは文句に合せキット川水を見込みて立ち、扇を以つて魚を谷川へ放つ形をなし、シザリて手を持つて其の水に潑々たる魚の奇瑞を指し示す、此の僅かの間こそ此の前半中の活動場所にて、勇ましくも亦目出度、何となく人間界を放れたる心地せらる、此の一曲中の見所なり。

謡の切れ目へ早鼓を打ちかけ、狂言方は幕の内にてヤルマイゾ〳〵と叫ぶ。

ワキは幕の方を見込み驚きたる模様にて。

荒笑止や追手がかゝりて候

シテは兼て期したる如く沈着て。

何事も此尉に御任せ候へ……

ワキは囃子方の後へクツロギ、シテとツレは船を持ち來り王を隠し、シテ舳の方ツレは艫の方に坐し、何事もなき面持にて居る。

此のシテの仕事終りたる後、狂言方兩人、弓矢と鎗を持ち、ヤルマイゾ〳〵と言ひつゝ出で切りに天皇の行衛を探すことあり、尉に向つて其の行衛を問ひ、尉は耳の遠きふりをして淨見はらを言ひ違ふなどの事あり、結局狂言方は船の伏せあるを不審がり之れを探さんと言ひ、將に探さんと事迫りたれば、尉は大に怒り、漁者の身にて船を探さるゝは家を探さるゝも同じことなり、斯る狼藉人は多數を集めて討取るべしとて、聲を揚げて多くの親族を呼び集めんとし、追手の人々は此の威ひに恐れて逃げ歸る事あり、形としては孫もあり彦もありと指折り算へ、あの谷々峯々とさし分け、

打止め候へと手を打合す位の事にてさしたる事もなき樣なれ共、其の形の拙くしては見らるゝ所ならず、狂言とのセリフながら謠方亦大に心持あり、此所亦一曲中の一要所なり、間狂言の逃げ入りし後よりシテは徐ろにシテ柱際迄進みて篤と見送り、最早是れなれば大丈夫なりと見極めし如く、氣を換へ船の方を向きながら伸々と。

のう聞こし召せ追手の武士は歸りたり

ツレは輕くシテは重き別はあれ共伸々とせる内に心のイソ〳〵と勇みある心持は同じく謠ひ進みて威ひよく地へ渡す。

えいや、えいと

地は隙さず受け伸〳〵と引立ちたる内に何となく御有樣の物あはれ氣なる趣きを含みて。

舟引起し玉體の……

シテとツレ兩人にて文句に連れフウワリと船を起して舞臺の眞中の方へ置き、後見人は之れを取り入り、子方は立ちて脇坐へ行きて腰桶に羅り、ワキは出でて地謠の前に坐し、シテは大小前、ツレは前の方少し下りて各々坐を占め、劇的動作は一段落を告げ、是れより純粹なる神仙的動作となる、以上は謠といひ、動作といひ、其の劇的なる丈け表情に富み、觀者の注意を惹き易しけれ共、若し其の度を過る時は往々芝居風となりて能樂固有の品位を傷ふ恐れあり、是れ演者の最も謹むべき點にして、觀る者聞く者の又大に注意せざる可らざる所なり。

地は直に太く浮きやかにクリ地を謠ふ、然れ共何となく逆境に在る趣きは離れず。

夫れ君は舟臣は水……

ワキにてサシを謠ふ事既に普通の例に違ひたるのみならず、其の謠方も普通のサシの如くならず、され共サシたる本色は何所迄も離れねば、其の土臺はサラリと滯らざるを主とし、其上へ深き感慨を述ぶる趣きを添ふるは其の節付の働きなり、其邊の斟酌こそ此の場合に於ての謠方の注意なるべし。

有りがたやさしも姿は山人の……

クリ、サシ、クセと行くべき順序なるを、サシの終りをオトシて氣を換へ上歌的の謠方となる、是れ此の曲の普通と異なる點にて、此所亦伸々と謠ふ內にシッポリと感慨を籠らしむ。

身は十善の甲斐ぞなき

夫婦の老人は恭なさに泣き居たりとシヲリ、此所にシッポリと一段落を告げ、更に物靜かなる內に神々しき趣きを示してクセとなる。

さる程に更けしづまりて物すごし……

餘りキッパリせぬ樣にいつとなく陽氣を生じ來りて神々しき趣きを增す、將に滅せんとせし燈火の何時となく光りを回復し、花ふり異香薫じ來れるが如し。

しかも所は月雪の……

クリより中入迄の變化は實に特種のものにて他に類例を見ず、此歎々の變化こそ此の曲中の謠所にて、聞く人の心耳を澄すべき要所なり、中入の仕方も亦頗る異樣にて、三吉野なれやよりツレ先に立ち、シテ之れに續き謠の間にボンヤリと入る、人間界は變じて將に神仙界に入るものゝ如し。

謠の終り「五節の始め是れなれや」に掛けて囃子方は下り羽を打出す此下り羽にて天女出でゝ舞をまふ、是れ亦他に類なき舞と拍子の關係にて、此曲の特異の點とす。

乙女子が……

下り羽の謠方は普通にて勇ましく浮きやかに。

神々も來臨しより謠も强くなり、シテ頭より衣を被き橋掛りへ出づる。

シテは太く丈夫にうたふ。

王を藏すや吉野山

地は威ひよく强く進みて謠ふ。

即ち姿を顯して……

シテは衣を取り姿を顯す、赤頭を被り、面は大飛出、色鉢卷をし、厚板の着付に、半切、狩衣、腰帯、扇を持つ、謡の返しに舞臺に入り、文句に合せて飛躍活動其の形色々あり、壯快の狀、前半陰鬱の氣を拂ひ、天下泰平、王威發揚の姿を見せて目出度終局となる。

忠度

前シテ……老翁　後シテ……忠度靈
ワキ……旅僧　處……須磨浦

忠度は平相國の弟にして文武兩道に達し、且つ和歌に長ず、都沒落の砌り、狐川より引返して夜中俊成の邸を訪ひ、其の歌集を托して出軍し、戰死後俊成の千載集を撰するに當り、さゝ波やの詠歌一首を加へしは、歌道の美談として世の人口に膾炙せる事蹟なり、作者之れを骨子として此曲を作る、而して忠度の事を謡曲に作るもの二あり、一を俊成忠度とし、一を此曲とす、今兩者を比較するに、甲は俊成と忠度を直接せしめて、讀人知らずと記されし遺憾を漏し、互ひに睦み語りて後、修羅道の苦患も和歌の德に依りて免かれ得たりとして曲を結び、乙は俊成の臣下たりし僧を出して間接に讀人知らずの遺憾を傳へしめんとし、行暮れての和歌を取つて、僧と値遇の緣となし、忠度最後の物語をなして曲を結ぶ、其の登場の人格より見れば、俊成といひ、六彌太といひ、陪臣の僧となりしものより高き事勿論なれ共、其の曲より見れば、反つて忠度の方を重とす、是れ全く作意より來る所の顯象にして、作曲の輕重は單に登場の人品の高下に關するものに非ざる一證なり、理窟より見る時は、登場の人物に位ある時は、其の曲も亦重き筈なれ共、能樂の趣味は理窟より來らずして其の模樣より生ず、是れ俊成忠度の輕くして、忠度を重しとする所以なり、忠度は修羅物中賴政、八島等に亞ぎ、俊成忠度は、經政、敦盛等と伍を同うす、之れを軍人に比せば大尉と少尉の別は確に

在り、蜑人の薪を負へるにて須磨の地形を明にし、薪に花を折り添ふるといふ黒主の和歌の連想より、櫻木を呼び起し、行脚僧と忠度の亡靈を會して行き暮れての和歌を活動せしめ、情景並び振ひて趣き殊に深し、前半の作意こそ殊に此の曲をして重からしむる所以ならんか、朧月夜の花の下に旅僧と老人の對話、濱風も身にしむ心地ぞする。

囃子方坐着きて直に次第を打出し、一定の寸法により、僧ワキ三人出で、舞臺に人り向き合ひて次第を謠ふ、春陽の天に行脚の僧、心の長閑なること勿論なり、然れ共俊成卿に仕へし人の、主君の世を去りて後、特に出家して西國行脚を志す、何か心に期する處なくんばあらず、須磨の浦にて忠度の亡靈に會すること偶然にあらず、長閑なる内にも何となく沈める氣の離れざるも理なり。

花をもうしと捨つる身の、月にも雲はいとはじ

地取りにてワキ正面向き名乗ること通常。

是は俊成の御内に在りし者にて候……

以下文章は總て道行に相違なきも、サシ、下歌、上歌と分るゝ丈け自然其位に重みあり、サシは伸々とサラリ、下歌はシッポリと、上歌はうるはしくうたふこと通常なれ共、憂に心はあだ夢の、覺る枕に鐘遠きなど文句柄としての心持は自然に其の趣きを顯さゞる可らず、謠に文句をうたふといふことあり注意すべし。

城南の離宮に赴き……

能　時にはワキの須磨の浦に着きたる詞あり。

一聲にてシテ出づる、シテは、面三光尉・尉髪、のしめ、水衣、腰帶、杖と木の葉を持つ、木の葉は薪を代表するもの、手向心の含まるゝ所最も味ふべし、能樂の眞味は個樣の内に存在す。

次に一聲の謠ありながら、先づサシを謠ふ、是れ大に注意すべき所、流義によりて和吟あり强吟あり、山海に近き須磨の浦の地勢と、顯れ出づる人物の唯ならぬを此の

數句にて盡す、謠ふ心持も何となく物ありげなるを要す。

實に世を渡る習とて

一轉化して仲々とうたふ。

海人の呼聲ひまなきに……

再轉化してサシとなりサラリとうたふ。

抑も此須磨の浦と申すは……

又轉じて詞となる。始めて此に若木の櫻を認む、何氣なき内に籠る思ひ深し。

又此須磨の山影に一木の櫻の候……

僧の來りし爲めに顯れし身の、殊更に知らぬ振りして手向をなし、其儘に歸り去らんとする趣き、技として爲すべきなく、謠として謠方もあらぬ共、心持は千萬無量、作者の苦心は即ち演者の苦心なり。

殊更時しも春の花……

前段の趣き思ひ深くして謠方重からず、前へ進みて坐し、木の葉を下に置きて徐に歸り去らんとす。

足引の山より歸る折毎に……

此のものゝしき老人を如何でか見逃すべき、ワキは早くも呼び止む。

如何に是なる老人……

何氣なく輕く答ふ。

さん候　此浦の海人にて候

不審を起す僧は眞面目、氣を掛けて問ひ試む。

海人ならば浦にこそ住むべけれ……

不審を起さしめし老人は、兼てより心に期する所、忽ち捕へて放さず。

そも海士人の汲む潮をば……

野心なき僧は釋然として理に服し、忽ち捕へられて夢幻場裡の人となる。

實に〳〵是れは理なり……

理窟は一つに合して彼我の別なく、唯漠然と互ひに謠ひて現在の有樣を叙す、ワキはサラリ、シテはドッシリの心持は例の通りなれ共、柴といふものゝ候へばより、合方となれば、其前のワキの謠は語尾に渡す心持あり、餘りに愚なるのシテの謠は輕く拔いてうたふ。

絶間を遲しと鹽木とる……

地はシッポリと受けて伸々と輕く物閑にうたふ、此所にて若木の正面を見、浦風と見廻し、山の櫻と高く上を見るなど趣き深き所なり。

實や須磨の浦……

何時の間にか捕へられたるワキは、益々彼れの手中に入りて宿を乞ふ。

如何に尉殿早日の暮て候へば一夜の宿を御かし候へ

待設けたるシテは輕く答ふ。

うたてやな此花の蔭ほどの御宿の候べきか

流義によりては實に御宿がな參らせ候はん、や。と氣付きたる心持にて、此花の蔭ほどの御宿の候べきと謠ふもあり、又一種の趣きあり。

ワキは愈々彼れの望み通りに問を發す、魔法遣ひに使はるゝが如し。

實に〳〵花の宿なれ共……

此に始めて目的の場所に達せり、古歌を詠じて花は主たる説明を試みんとして吊ひの事に及ぶ、愚かにましますと尤めながら、吊ひを促す心は切なり、此の苔の下とジッと下を見込む技もあり、謠に心持を含むこと勿論なり。

行暮て木の下蔭を宿とせば……

ワキも兼て心に期せし故主の友、忠度の和歌を聞きては捨つるに忍びず、吟詠しつつ確むる詞は薩摩の守とシッカリと渡す。

行暮れて木の下蔭を宿とせば……

シテは隙さず附けて謠ふ、他人の事の如くにして自から我身の上を言ふ。

忠度と申し人は

愈々故主の友の墳墓と聞ては今更の如く驚かれつゝ吊ふ。

こはそも不思議の値遇の縁……

互に謠ひ進み寛たりと地へ渡す。地はドッシリと受け、念頃に弔ふ心持シッポリと折れ合ひロンギとなる。

名も忠度の聖聞て……

弔ひを受けて嬉しく、沈着てシッポリと。

雖有や今よりは……

夕の花と櫻を見、夢の告とワキへアシラフ丈けにて徐々に中入となる。

夕の花の蔭に寝て……

前半は形として左程見るべき所もなく、謠と心持を以つて、其趣きを表示す、此の能の輕んず可らざる所なり。

中入中在所の人出でゝワキとセリフある事常の如し。

セリフ濟んで待謠となる、シッポリと物淋しげにうたふ。

一聲につれて後シテ出づる、面中將、黑垂れ、梨子打、又は中垂烏帽子右折れ、白鉢巻、唐織、大口、長絹又は單法被、腰帶、太刀、矢に短冊を着けたるを後に指す、舞臺に入りシットリと謠ふ。

懐かしや亡き跡に……

クドキの如き心持ちにて謠ひつゝある内、此所にはハッキリと心持變り、ヒラキて右をキッと見る。

須磨の浦風も心せよ……

クリ地となり勢ひよく謠ひ進む、シテ床几に掛る。

實や和歌の家に生れ

ワキのサシとなり太く勢ひよく。

中にも彼の忠度は……

地はサラリと受け、終りを折合ひて打切となる。

抑後白河の院の御宇に……

打切にて氣を變へ、シツポリと輕く。

年は壽永の秋の頃……

又打切りにて氣を換へ、伸々と張りて謠へども何となく物哀れなる心持を含む、シテは返しより立つて舞ふ。

さも忙はしかりし身の……

俄に氣を換へ威ひよく強く謠ふ、シテは橋掛へ行き遙かに海上を見渡す形をなす。

去程に一の谷の合戰

シテ謠ひながら舞臺に入り、文句に合せ形あり、六彌太を組み伏せ、太刀に手を掛

くる邊より最も壯快の技あり、見所なり。

我も舟に乘らんとて……

地は威ひよく受け鋭く謠ひ進む、シテは坐したる儘にて文句に合せ形あり。

六彌太が郎等……

地も心して渡し、シテは氣を換へて哀れ氣に浮きやかに謠ふ。

御聲の下よりも

地もシテの心持を受け打落すにてシツクリと靜まり、シテ亦シツトリと。

六彌太心に思ふやう

地もシツトリと受け居付ぬ樣にうたふ、シテは長月比より立ちて舞ひ御名ゆかしきよりクツロギて矢を拔きて出で短冊を付られたりと之れを見る形あり。

痛はしや彼の人の御死がいを見奉れば……

氣を換へ十分に乘りて浮きやかに謠ひ、シテは拍子を踏みつゝカケリとなる。

行暮れて木の下影を宿とせば……

カケリ常の如し、止めに短冊を取り見ながら浮やかに乗りて謡ふ。

花や今宵の主ならまし

輕くシツカリと。

忠度と書れたり

地は隙さず受けてサラリと謡ひ、痛はしきと折合ふ。

扨は疑ひあらしの音に……

更に氣を換ふ、軍物語り終りて現在請托の詞となる、氣は緩るみ、謡はしまる、軍人たりし忠度は再び亡靈となりて特に消え去らんとす。

御身此花の……

主人と親むべき花も失せ果てゝ、唯香ばしき言の葉の殘るを聞くのみ。

班女

シテ……狂女　ワキ……吉田何某　處……美濃

狂女ものに相違なきも、前半は未だ心の狂はざる憂愁に沈める遊女にてあり、後半中「クセ」に於て靜かに戀慕を叙することあるより、三番物として取扱ふこともあり、されば舞は序の舞とするもあり、又中の舞とするもあり、流義により、時により必ず一樣ならず、申さば三番物と狂女物の間の子的のものなれど、其曲柄より吟味しては狂女ものとして重くれず取扱ふ方趣味深きを覺ゆ。此の曲と隅田川と連絡あるもの丶如く說ける向もあれど恐らくは牽强附會なるべし、唯野上の宿の遊女花子なる者の、都より下りし客に慣れ初め、暫ばしの筐とて取替せし扇を見て、やる瀨なき戀慕の情を發露せるに、唐土の班婕妤の故事を結び付けたる小說と見る方面白かるべし、遊女の戀を扇によりて美化したるが、作者手腕の

存する處にて、重くれず可憐なるが此曲の本領ならんか。

此曲を序破急に大別すれば、中入迄は序にして、後の出より逢はでぞ戀はそふ物迄を破とし、ワキの從者を呼びて扇を見ることを望める所より終局迄を急とす、而して其の破の内には又三段の區別あり、出よりクリの前迄にて一段、クリよりクセの終り迄にて一段、舞より戀はそふ物を迄にて一段とす、各段心持の分るゝ所あるはいふ迄もなく、能く其變化を味つてこそ其曲の面白味も知らるゝ譯なり。

囃子方着坐後、女姿の狂言方出で、自から野上の宿の長なることを名宣り、我が抱への花子といへる上臈の、過ぎし春の頃、都より來りし吉田の少將と契りしより、其人を戀ひ侘び、筐に殘せし扇にのみ詠め入り、一切我室より出ずなりたれば、已むなく之れを追ひ出すべき由を告白の後幕の方へ向ひシテを呼び出す、シテは、增、小面、孫次郎の類の若き女の面、帽の着付に唐織の着流し、鬘、同帶等例の如く、扇を持ち、さも打沈める風情にて出で、狂言方のさも憎々しげに詈れる内に靜かに舞臺へ入り、シテ柱前の常坐へ坐す、狂言方は猶も罵りながら、其の扇を奪ひ取り、シテの前へ打付けて退く、シテは狂言の退きし後徐に扇を取り上げ元の如く手に持ちて、さも物思ひに沈める心持ちにて靜かに。

げにや本よりも定なき世と言ひながら、うきふししげき河竹の、流れの身こそ悲しけれ

シットリと謡ひ終るを受けて地もシメヤカに謡ふ。

わけ迷ふ行衛も知らで濡れ衣

上歌丈けに引立ちながらシットリと物思ひに沈める趣きを謡ふ。

野上の里を立出でて……

返しより立ち近江路と右をうけて別れしよりと少しく出て開き、身ぞつらきとシヨリて其まゝ中入となる、此間追立てられてスゴ〳〵と出行く丈けの所なればどこ迄も打沈める趣きにて靜かに謡ひ靜かに動きて前半を終るなり。

次第にてワキ出づる、ワキ風折、厚板、大口、長絹、腰帶、扇、ツレ二人素袍上下

にて一人は太刀を持つ、舞臺に入り、品よくシッカリと謠ふ。

歸るぞ名殘富士の峰の、〳〵、行て都にかたらん

地取りにツレは坐しワキは正面へ直して、凜々しく優美に名宣る。

是は吉田の少將とは我事なり……

都をたちて故郷へ歸る道行なれば、秋の空ながら勇ましく、威ひよく優美に謠ふ。

都をば霞と共に立出でて……

着セリフ例の如く、從者に命じ花子を尋ねさせしに、長と不和なることあり、今は行衛不明といふに、已を得ず、若し歸り來らば都へ知らせよと申殘し直に都へと急ぐ、順序より言へば此所更に道行のあるべきなれども、其重複を避け、簡略法にて直に都へ着くことゝし、更に其まゝ下加茂の社へ參詣に出掛くることゝなる、當時の下加茂は參詣の人も多く社内は貴賤群集して賑ひつゝあるものと想像すべきなり。

かゝる所へ一聲の拍子に伴れて後シテの狂女出づる、面は前と同じく、唐織の右の肩を脱ぎ、平元結を掛くる、舞臺に入り美しくサラリと謠ふ。

春日野の雪間を分けて生ひ出くる、草のはつかに見えし君かも

先づ古歌を引きて一聲を上げ以下詞と節とに分ちて抑揚を附けしは作者苦心の存する所にて幾千か心持の區別あり、下音にてメラズ、上音にてコケズ、謠ひ進みてカケリとなる、カケリは狂ひ舞ふ姿の色彩にて狂女ものには附ものなり、カケリ終りて氣を張り晴々と麗はしく。

戀ずてふ我名はまだき立にけり

地は隙さず受け威ひよく。

人知れずこそ思ひそめしが

シテは更に大きく受けて垂れぬ樣に謠ひ納む。

あら恨めしの人心や

カケリを中心として活動を續けし狂女は爰に一段落を告げ、氣を鎮めて滯らぬ樣

に。

げにや祈りつゝ御手洗川に懇ぜじと、誰か言けん虚言や……

シツトリと地へ渡し、地はシツクリと受け静に。

置所いづくならまし身の行方

氣を替へ張りながら静に。

心だに誠の道に叶ひなば……

開きてすゆる足拍子を踏み返しに右へ受けて出、角取り左へ廻り大小前にて開き正面を拜むといふ順序に此謡の間に立廻る。ワキ連の太刀持は狂女に向ひ。

いかに狂女、なにとてけふは狂はぬぞ面白うくるひ候へ

シテは聞とがめし心持にて。

うたてやなあれ御覧ぜよ今までは……

あれ御覧ぜよと右を見、あら悲しやとシホル外別段變りしこともなく應答終り「夜の琴の聲」と静かに謡ひする、地はシツポリと受けて静に謡ひ納めてクリに移る。

巻き上げし水の頂上より落ち下る如く氣を張り伸々と謡ひしクリは本ユリにてユリ下げ爰に調子を整へてサシに移る、サシはサラリと滑りなく。

夕べの嵐朝の雲

シツポリと謡ひ納めて静かにクセとなる。

翠帳紅閨に……

シメヤカにシツポリと謡ふ此クセは戀慕の情を巧みに風景に調和しありて詞も淫靡ならず舞の手も優美なれば、普通のクセ舞に比して見るべきものあり、欄干に立ちつくしてとシテ柱又は橋掛に寄りて立ち、あの松をこそと橋掛の松を見る形など著しきものなり、クセの内にも亦序破急あり、即ち始まりより今の世までもらすらん迄序にして、去にても我妻のより上げ迄は破、上げより終り迄は急なり、舞の序の舞となるか、中の舞となるかに就ては、此クセの位に差違あること勿論にして、舞とクセと

の間には自から離る可らざる關係あるなり。

繪にかけると舞となる。此舞亦序破急あり、舞の終りは無論急となりて局を結ぶものなれば、月を隱してのワカの謠出しは其位に從ひ、クセの終りとは大に違を生ずるなり、伸びやかに美しくサラリと謠ふ。

月を隱して　懷に持ちたる扇

上羽の形をしながらシテの謠ひ終る所へ大小の鼓は合せ頭を打ちて爰に位を定め、地は其位によりてノリて謠ふ。

取る袖も三重かされ……

シテは地と掛合ひに謠ひながら、文句に合せて仕形あり、形としての見所なり、次第に謠ひ進み、爰に一つの極所を作りあらよしなやと一頓挫をなす、シテは氣を替へて輕く。

形見の扇より

地も輕く受け謠ひ進むに從ひてシテも活動を續け、あはでぞ戀はそふものをと扇を打合せ後へシザリ安坐してシホリ爰に一段落を告ぐる。

ワキは此樣を見て此狂女の尋常ならざるを悟り從者を呼びて狂女の持ちたる扇を見たき由を申て取て來れよと命じ、從者は此旨を狂女に告げ、狂女は一旦は筐のある爲め忘られもせねば寧ろ人手に渡してしまはんかとも思ひしが、渡さんとして見ると何となく惜しまるゝ心地して放し兼るといふ切なる心の轉化を見する、最も味ひある謠所ありて爰に一變化を起し打切にて位を定め、サラリと切のロンギとなる。

此方にも忘れ形見の言の葉を……

地は掛りシテは押へる兼合は例の通りにて謠ひ進み、結句ワキも扇を取出し、シテの扇と相對し、源氏に因める文句さへ引きて濃厚なる情と優美なる景趣を合せ、見る者をして唯其美しさに恍惚たる間に其の局を結ばしむ、花散りて尙香の馥郁たるが如し。

藤榮

シテ……藤榮子……月若　ツレ……鳴尾外數名
ワキ……最明寺時頼　處……攝津

此の能は其の筋は頗る簡明であつて、彼の最明寺時頼の行脚中、蘆屋の里に於て、叔父の爲めに所領を横領せられし孤兒のありしを、其家に一宿して事情を確め、叔父なる藤榮の豪遊中に出向ひて、其の理非を糾し、兩家共に繁昌に至らしめたりといふことに止まれ共、詳細に其の能柄を吟味すれば、頗る疑問に屬すること多し。

第一此謡の文句は忠度と自然居士とに出で居るもの多くして果して何れが元なるやといふ疑問なり。

第二は此藤榮といふ人は私慾にして人情に薄き人には相違なきも此の曲柄は是れを惡人とし孤兒に同情を惹くべく情を主として演ずべきか、下り羽の所と謂ひ舞の場といひ和氣靄々として歡樂極りなき趣きを主とし見る者をして歡喜の感を起さしむる樣に演ずべきか、則ち悲哀の情に訴ふべきか和樂の趣きを主とすべきかといふ疑問なり。

第三は最明寺が一宿して何時の間に夜が明けしものか藤榮の船遊は翌日の事か當日の事かといふ疑問なり。

第四は重書を預けるといふに至れるは此僧に對し大に信を置くべき所あるものと見ざる可らざるが、此旅僧に斯く迄信を措くに至りしは如何なる詞又は行動によれるか、即ち曲の上から言へば何所で其の界を認むべきかといふ疑問なり。

右の内第三第四は些細の事であり第一は文學上の問題にして演技の上に大なる關係あらざれども第二の疑問に至りては之れを演ずるに當りて大關係あり大に研究すべき必要ありといふべし。

元來此の能の脇は之れを歌舞伎に比すれば、差詰め黄門光圀卿ともいふべき役にて、座頭たる人之れを勤めねばならず、されば此の曲をして歌舞伎の如く情を主として演ぜしむるものとせば、藤榮はどこ迄も憎々しげに仕立て、月若に對する同情を十分に惹き付け置き、藤榮の榮華に誇りて最も意氣揚々たる所を、最明寺の一喝にて大打撃を加へ、金襴の上下の上より縄からげとして引据ゑ、大向をしてヤンヤと叫ばしめざる可らず、然るに能樂は大に其の主義を異にして、景趣を表とし情を裏とするものなれば、感情を極端に惹く事を避け一旦は打撃を加へて死地に陷らしめながら、仇をば恩にて報ずるなれば、更に活路を與へて感情を融和し、一家繁昌目出度し〳〵で和氣靄々の裡に終局せしむ、此の筆法より見る時は是れは蘆屋の藤榮なりと名宣る所も、榮華に誇りて權柄なる心持はあるべきも、決して憎々しげなる感を惹く如き態度ある可らず、從つて下り羽より曲舞の終り迄は、見る者聞く者をして歡樂場裡に在るの想を爲さしむること肝要なるべし、然れ共此の藤榮といふ能は、月若といふ稚子の、無情なる叔父の專横の雲に覆はれしを、最明寺の仁德によりて、再び光明を放つに至れるを骨子として作られしものなれば、情に於て重きを爲せる作柄に相違なきも、能樂の本體として情の一方に馳るを許さず、下り羽、男舞、曲舞、喝鼓等の舞樂を以て其の裝飾とし、勉めて景趣を加へ優美なる品位を保たしめんと計りしものなり、景情併行の鹽梅こそ、此の能に就て最も注意すべき要點ならんか。

囃子方着座後、箔長袴を着したる子方を先に立てゝ熨斗目素袍上下を着したる男（脇ツレ）出でて地謠座の前に座し、次第にて角帽子、熨斗目、水衣にて笠を被りしワキ出で舞臺に入り、シックリと次第を謠ふ。

行衛定め道なれば　越方もいづくならまし

地取に笠を脱ぎ正面向きて名宣る。

是は諸國一見の僧にて候……

此邊は總て鉢木ソックリにて普通の旅僧ならぬ品位を保つこと肝要なり、唯雪中山路に行惱むと春日海邊に逍遙するとの心持に相違あるは忘る可らず。

名宣濟みて笠を被り悠々と伸びやかに謠ふ。

城南の離宮に赴き、都を隔つる山崎や……

下歌上歌例の如くにて文句は總て忠度と同一なれ共、最明寺時頼といふ丈の貫目は一段の重きを加ふ。

道行終り笠を脱ぎ、着セリフ例の如くにて地謠座の方を向き案内を乞ひ、ワキツレの男出でて之れを受け、見苦しければとて一應辭退するなどは他と異りたる所なれども、愈々宿を貸す段となりては通常と異りて頗る簡潔な手續きとなり、ツレ男はイソ〳〵威ひよく謠ひ捨てる。

さらば御宿を參らせんと、いぶせき床の塵ばらひ

地は隙さず受けて威ひよく氣を掛けて謠ひ出しながら、松風の吹き入りて夢も結び難き粗屋の光景を想像せしむる丈けの趣きを備へてジリリツと折合ひ打切となる。

とふの菅薦、しきりに松風や、浮世の夢を覺すらん

此の文句に合せては脇に於て松風の吹き入る樣を想像せしむる爲めの見廻しの形もあり、ワキとしては大に心持ある技所にて、僅かの所ながら頗る趣きありて注意すべき要所なり、打切にて靜り氣を換へ悠々と徐かに謠ふ。

扨いつの世の情ぞや、雨は降られど此宿は、一樹の陰と覺えたり

此間にワキは脇坐に行きツレ男は元の坐に復して坐す、此の地謠の間に一夜を明したるものと見て以下は翌日の事と想像すれば良き譯なるに、其後ワキの詞に、「今夜の御宿の御報恩に」といふ文句ありて、爰に一つの疑を挿まざるを得ざる譯となれ共、前に日が暮れて宿を借るといふことありて、後に今日は日もうらゝにて浦遊びをするといふことのあるより察すれば、爰に一夜を明したるものと見るが至當なり。

一夜を貸して貰ひし禮を述べると稚子を見付けて其素性を尋ぬるとの間に「や」とい

ふ詞あるは、フト氣付きた形容詞にて、其心持の分界線なり僅かの詞ながら注意すべき謡所なり。

誠に御志難有う候、や、是なるをさなき人はよしありげに見えて候、たが御子息にて候ぞ

ツレ男は未だ此旅僧の何者なるやも知らざれば、世を忍ぶ身の浮とは名乗らず、何氣なく答ふ。

いや名も無き人にて候

烱眼なる最明寺は一目して此の稚子の尋常ならざるを看破したれば、一通りの申譯は耳にもかけず。

いかに仰せ候共唯人とは見え給はず候、何の苦う候べき眞直に御名のり候へ

男も去る者、此の旅僧の尋常ならず、大に頼むべき人格なるを信じて潔く名宣る。

何をか包み申すべき是は蘆屋の先地頭藤左衛門殿の御子息にて渡り候

扨こそ我が目きゝに違はず由緒あるものゝ零落せる事よ、是れには定めて入組みたる事情あらん、行脚の目的は全く此點にありと、最明寺は大に氣を掛けて、

のうそれは何とてかやうに賤しき海士の奴とはなり給ひて候ぞ

男は包まず事實を告ぐ。

叔父御の藤榮殿に押領せられかやうに不思議なる所に御入候

最明寺は其事實を信ずれ共尚も之れを確めんものとて。

言語同斷の次第にて候、さて重書をば御持候はぬか

男はさも確かに。

重書も之れに候

愈々其の確證を得んとて。

そと御見せ候へ

男は主家を大事と思ふが爲め容易には之れを手渡さず。

いやく大事のものにて候程に、いかゝにて候

最明寺は既に此の可憐のものを救ひ得させんとの覺悟あれ共未だそれを顯さず、遠て一見を乞ふ。

そと見申てやがて返し申さうずるにて候

男は既に半ば此の僧の尋常ならざるを知り賴む心の生じ居れば之れを信用して。

さらば御意にて候程にそと御目に掛け候べし

最明寺は之れを受取り開きて堂々と讀上ぐ。

何々蘆屋の庄七百餘町の所、一男月若に讓り置く所なり、蘆屋の藤左衞門尉家俊判

シツカリと語尾を強く讀上げて目を外し文を下げて、いかにも確證なりと信じたる心にて。

や、何とて個樣の證跡正しきものを御持候ひて、御訴訟は候はぬぞ

男は如何にも歎息せる心にて。

其事にて候、運の盡くる所は、最明寺殿さへ修行に御出で候由承り候間、何とも了簡なく候

最明寺は扨こそと心に思ひながら、未だ其事實を顯はさず、暗に我を賴むべしと言ふ心にてシツカリと。

あら痛はしや候、今夜の御宿の報恩に、此稚き人を三日が間に世に立てゝ參せうずるにて候

賴母しげなる旅僧とは思ひしも餘りの事に信用されず。

是は何とやらん誠しからず候

僧は慰めながら諭す心にて。

御不審尤にて候去りながら……

其擧動尋常ならず其の言語に誠あるを見て平臥に賴む心となり。

さらば賴み申さうずるにて候

是れより藤榮の居る所へ赴くべしとて三人打伴れて立ち暫く離子方の後の所へ休息す。

シテは侍烏帽子、厚板、直垂の上、大口、腰帶、小刀にて狂言の太刀持を伴れて出、舞臺に入り常坐に立ちて、シッカリと名乘る。

是は藤屋の藤榮にて候、今日は日もうらゝに候間、浦遊びに出でばやと思ひ候

今迄はあばら屋に孤兒の淋しかりし光景に引換、時めける紳士の、うらゝかなる日の浦遊び、秋は變じて春となりしが如し、此所にて狂言を呼び出してセリフあり、其のセリフによりて、遙かに藤榮の清遊の興を助けん爲め、多くの船をしつらへ、笛鼓などの囃子物をして、鳴尾何某が此所へと向ひ漕ぎ寄せ參らんとする樣の如何にも仰仰しく、藤榮の現在榮華に誇りてある樣も想像せらる、セリフ濟てシテはワキ坐に行き角掛け腰桶にかゝり居る、又立ち居るもあり下り羽の勇ましき拍子に伴れ、鳴尾シテと同じ裝ひにて出で、續てツレ男段のしめに素袍の上下を着右の肩をぬぎ笹を擔げて出で、後に狂言の能力一人同じく笹を擔げて從ふ、近傍の豪族共何れも藤榮の當時の威ひに諛び其の意を迎へん爲めに賑々しく集り來る樣を想像すべし。

橋掛りに立ち下り羽の打上を聞てツレより浮やかに謠ひ出す。

川岸の

地は受けてうるはしく。

川岸の、れじろの柳、顯れにけりそよの

シテは立ち橋掛のツレの方を向き扇を開き上羽をしながら、浮きやかに。

顯れて

地はうけてうるはしく。

顯れて、いつかは君と

以下掛合は流義によりシテと地もあればツレの交るもあり、兎も角船の次第に近寄るに從ひ雙方より歌ひ和して、いかにも面白く打興ずる樣にて、以て其の豪奢の趣きも想像せらるゝなり、枕さだめぬよりシテとツレと入替り鳴尾は脇坐に行き、シテは常坐に行きて相對す、殘りのツレは後見坐より切戸へ入る。

某に御隱し候程に、御酒迎の爲に酒を持せて候、一つきこしめされ候へ

シテはいと滿足の體にて。

かゝる祝着なる事こそ候はれ、さらば一つ給べうずるにて候

鳴尾は能力を呼出して一曲かなでよと命じ、狂言は小舞をまひ、此の扇をさし申さうとて、藤榮に舞をすゝめ、しては促されて、伸々と威ひよく謠ふ。

芳野龍田の花紅葉

地は受けて。

更科越路の月雪

破がかりの男舞となり、男舞濟みて大小前に立ちサラリとサシを謠ふ。

爰に又蚩尤といへる逆臣あり

地は受けてサラリと謠ひ進み曲舞となる。

かれを亡さんとし給ふに

此曲舞は普通のものと少しく趣きを異にし、散り浮く柳の葉の上に蜘の乘りしが風のまに〳〵次第に流るゝ樣を文句に合せての形ありて面白し、上羽以後普通の手續きにて終る、此文句は自然居士と少しも異ならねども位に於ては此方サラリとして威ひよし。

曲舞の終りの所よりワキは扇にて覆面しながら脇坐の所より脇坐に行きシテの方を向き立つ、シテは曲舞濟みて扇を疊み橋掛一の松の所へ立つ。

ワキは能力に向ひさも鷹揚に。

唯今の舞まふたる者はいか成者ぞ

意外の問に肝を消したる能力は不審ながらに蘆屋の藤榮なることを答ふ、ノキは更に語を強めて。

其藤榮に今の舞こそ面白けれ、今一さし舞へ見うと言へ

能力は愈々驚きながら此旨を藤榮に告ぐ、藤榮は意外ながら今に思ひ知らせくれん

と心に期するものある如く。

最前は舞をまふて有間此度は八撥を打て聞せうと言へ

狂言は藤榮の意外の答をいぶかりながら又其旨をワキへ告ぐる、ワキは愈々横柄に。

急で打てと言へ

狂言は愈々呆れて退き、シテは後見坐にクツロギ喝鼓を着けて出で、キッパリと。

思ひも寄らぬ修行者に……

「態と撥を」と撥を見、「お笠の内へ」とワキの方を向き一足進みて開き、「叶ふまじ」と喝鼓となる。

喝鼓打上てより地謡は勢ひよくうたふ。

本より鼓は涙の音……

此所シテの形としては最も見所にて、橋掛りに行き「雨雲まよふ」と空を見渡し、とゝろ〳〵と足拍子、「はら〳〵〳〵と」撥をもて欄干を打つなど珍らしき形もあり、

「いざ打ふ」とワキの前へ進み寄り、將に一撃を加へんず意氣込にて撥もて扇を拂ひながら。

さし扇を除けられ候へ

ワキは扇を除くると共に最も威嚴ある語調にて威ひよく。

やあ是こそ鎌倉の最明寺實信よ見忘れたるか藤榮

シテはワキの顔を見ると同時に一驚を喫したる樣にて後へシザリて平伏し。

ワキは愈々鋭く。

何とて八撥をば打ぬぞ打てとこそ……

是れ迄は叱責する一方なれ共、是れよりは叱りながらにも語の心持を含みて、シッカリと。

汝は過分の振舞かな

シテの平伏したる後男は子方を先に立てゝ出ワキの次へ並び、「いかに月若此間は」

よりワキは子方の方へ向ひ重書を渡し、「又藤榮が事は」と再び藤榮の方に向ひて次第に語氣を和げて諭し顔になり、威ひよく「重て下知を下しけり」と地へ渡す、地は隙さず受けて勇しく謠ふ。

シテは平伏せる間に後見人出て喝鼓を外し、此地謠の「直なる時の」より立ち扇を抜き持ち子方の前に行き下に居り、「月若が心の内」と左の手を子方にかけ扇にてあふぐ。

地は氣を換へて心嬉しく。

頓て本宅に立ち歸り……

シテは子方を伴れて立ち子方を先に立てゝシテ柱の方へ行き子方を扇にて先へ押しやり、さも嬉しげなる態度にて目出度終局となる。

葵上

シテ……御息所怨靈　ツレ……神子

ワキ……修驗者　ツレ……大臣

源氏物語葵の卷に記されし、光源氏の夫人葵の上の物の氣に惱まされ給ひしといふことを種として作りし作曲にて鬼女ものゝ一つなり、鬼女ものとして重なるは道成寺、黒塚（一名安達原）と此の葵上の三番にて、道成寺は死靈、黒塚は現在の鬼女、當曲は生靈にて而も位置高き貴女の嫉妬より起る怨靈なれば、能の位として輕からず、シツトリとせる内に凄味ある趣き秋の月の暗雲に被はれし風情といはんか、梅花の薄靄に包まれし樣と評せんか、位あり、色ある生靈の出現、陰中の活動、物々しき能柄なり。

囃子方着座後々見人赤地の箔を持出、襟を前とし、裾を脇坐の方へ向け、少しく斜

に舞臺の前へ出す、是れ葵上の病床に居らるゝ所を形容せるものなり、次にシテツレの巫女、箔の着付、唐織着流しの上へ、白の水衣又は練衣を着、鬘、同帶、小面の面を被り、珠數を持ち出て脇坐に坐し、引繪き、ホラ烏帽子、厚板、大口、狩衣の大臣出、シテ柱前の立所に立て名乘る。

是は朱雀院に仕へ奉る臣下なり……

名乘り濟み地謡坐の前へ着坐して後、ツレに向ひ。

やがて梓に御掛け候へ

爰に於てツレは囃子方のイノリの打出しに伴れ神々しく靜かに謡ひ出す。

天清浮地清浮、内外清浮六根清浮

氣を替へ浮きやかに張りて寛つたりと。

より人は、今ぞ寄りくる長濱の、芦毛の駒に、垂纐ゆりかけ

終りの一句は輕く謡ひ捨つるをきつかけに、囃子方は心持を替へ、シテの出の一聲を打出す、シテは箔鱗形の着付けに同黑地丸盡しの腰卷をし腰帶を締め、唐織を坪折り、鬘、同帶、面は泥眼を用るを通常とすれども、流義によりては、靈女、槍垣女などを用ることあり、橋掛りにて、シッカリと物々しく謡ひ出す。

三つの車にのりの道、火宅の門をや出ぬらん

一段と聲を張り。

夕顔の宿の破れ車、やる方なきこそ悲しけれ

やる方なきとシホリ、謡終りて後囃子方のアシラヒに伴れて舞臺に入り、シテ柱の前に立ち、大小の方へ角かけて向ひ　打切を聞てシットリと次第を謡ひ出す。

浮世は牛の小車の、くゝ、廻るや報いなるらん

此次第の謡方は普通のと異り、物々しき怨靈の模樣を示す心持あり、是れ等は流義により差あれば、爰に其謡方に付き説明すること能はざれども、注意すべき聽所なり。

地取りに正面へ直し、氣を替へサラリと運びよく謡ふ、但し何處迄も物柄の何とな

く物凄く、物々しげなる趣きは忘れられず、且つ文句により心持もあり、容易ならぬ謡所なり。

下歌は輕くサラリと謡ひ出しながら、何となく物ありげにシックリと。

あら恥しや今とても、忍び車の我姿

氣を換へ張り上げながら物々しく。

月なば詠み明すとも……

「立寄り憂を語らん」と少しく正面へ出、更に氣を替へ物を探るが如く陰氣に。

梓の弓の音は何所ぞ、〳〵

謡ひながら右へ心付け返しに左へ心付す。

ツレは靜かながら滯らぬ樣に。

東屋の母屋の妻戸にいたれども

シテはシッカリと強くツレへ向ひ。

姿なければ問ふ人もなし

「問ふ人もなし」とシテのシホルのを見てツレはサラリと威ひよく。

不思議やな誰とも見えぬ上臈の……

「若しかやうの人にてもや候らん」と大臣に向ひ、大臣はツレに問ひ威ひよく。

大方は推量申て候、唯包まず名を御名のり候へ

シテは正面受けながらツレ大臣等の謡を聞き終り、シッカリと太く物々しく謡ひながら大小前の常坐へ至り坐す。

夫れ婆婆電光の境には……

「いつさて」とシホリ、「是は六條の」とツレへ心付、是まで顯れ出たるなりと又ツレへ心付るなど文句によりて形もあり、又謡の心持もあり、十分恨みを含める心持顯れて滯らず、サラリとハコビて輕からず、シテとしては最も大切の謡所なり。

地はシックリと受け、滯らざる内に物々しく謡ふ。

思ひ知ずや世の中の情は人の爲めならず

爰所迄はシテはツレに向ひ居り、打切に正面へ直し、地も一段氣を張りて物々しく。

我人の爲めつらければ……

「何を歎くぞ」と少しく立ち掛りて小袖を見込み、「恨はさらに」の返しよりシホリ、

さも思ひに堪へざる心持にて。

あら恨めしや

キッパリと强くツレへ向ひて。

今は打では叶ひ候まじ

ツレは氣を掛けサラリと。

あゝらあさましや六條の……

シテは愈々堪へ難き忌入れにて强く。

いやいかに言ふとも……

「今は打では」より立ちて小袖の側へ行き坐し、「ちやうど打ば」と扇にて打つ、ツレの謠より立ちてクツロギ、「思ひ知れ」と小袖に向ひ卷指し開く、地は隙さず受け威ひよくサラリと謠ふ。

恨めしの心や、あら恨めしの心や……

此一段曲中第一のシテの形所にて、先恨めしの心やと足拍子に始まり、常に小袖に向つて恨みを述ぶる心持を顯しての形あり、「水闇き澤邊の螢」と見廻す所は最も注意すべき形所にて、種々替の形もあり、澤邊の上を飛び散る螢火は三つか四つか將た幾十か、其の景色を目前に見すべきは全くシテの手腕に存す、品よく手少きもあれば、扇をかざし面を切り、最も派手やかに振舞もあり、力次第腕次第いか樣にも演じ得べき要所なり、「其面影も恥しや」とツレの側へ進み恥ふ風情の形は、澤邊の螢に次ぎての要所、「枕に立てるやれ車」と坪折れる唐織を捌き、「打のせ隱れ」と舞臺の前へ進みながら、頭より唐織を被り隱れ後見坐へクツログ中入をせずして此の内に面裝束の取換

へをなすは、二百番の能中此の曲に限れる仕形にて、壯麗の内に凄愴の氣充滿し、觀る人をして覺えず快哉を叫ばしむ、威ひに乘り過ぐれば唐織の前にのめる恐れあり、緩やかにしては氣を拔かし、シテとしては人の知らざる骨折り場所なり、唐織を被きし爲め途迷ひし、後見人に厄介を掛けし珍談も其例なきにあらず。

大臣は狂言方の從者を呼び出し、横河の小聖を招じて來れよと命じ、狂言方はワキを呼び出すことあり、ワキは兜巾、篠掛、厚板の着付、大口、縞水衣の裝ひにて手にいら高の珠數を持ち、悠々と橋掛りに出、堂々と強く謠ふ。

九識の窓の前、十乘の床の邊りに、瑜伽の法水をたゝへ……

太くシッカリと謠ひ置き、詞となると共に轉じて、強くサラリと使の者に對す、狂言とのセリフ濟て、狂言方は先に行きて、大臣に斯くと告げ、ワキは後より悠々と入り、シテ柱の前の立所を少しく前へ進みし邊りにて大臣の方へ向はんとするを見掛け、大臣はサラリと威ひよく。

夜陰と申御參目出たう候

ワキは堂々と。

別行の子細候へ共……

「あれなる大床」と大臣の敎ふるを見て、ワキは小袖の方に目を付け、最も威嚴ある態度にて篤と病床を見込み、幾干か驚きたる思入れにて。

是れは以ての外の邪氣と見えて候、やがて加持申さうずるにて候

大臣の宜しく賴むとの意を受けて大小前にクツロギ、大小鼓の打出すを聞きたる後悠々と立ち出、小袖の前に進み坐し、堂々と強く謠ひ出す。

行者は加持に參らんと……

兼て準備を整へたるシテは、既に面を般若に取替へ、打杖をも携へながら、前の如く唐織を被き、ワキの謠の間に脇の右の横手へ來り坐す、ワキは謠の終り頃に是れを認めて屹度此方を見込み、精神を込めて之れを祈る、是れよりイノリの働きとなる、

働きの順序は、シテは徐に頭を上げて立上り、被きし唐織を脱ぎて腰に纏ひ、ワキの進みてイノリ掛るを追ひ拂ひながらワキを打たんとする所あり、此所一段落にて囃子方はヨセ手を打つて其の威ひを助く、其れよりシテは腰に纏ひし唐織を捨てゝ橋掛りの幕前に進むを、ワキは後より追掛け行きてイノリ立て、シテは又之れを拂ひ除けつゝ、ワキを追ひ込み來り、シテ柱の際にて、追ひ捨て、シテ柱に寄り掛りてワキを見込む、爰二段目にて之れを柱巻といふ、其れより一旦下るをワキは追ひ掛け、シテ又之れを追ひ込み來り、舞臺にて更に一奮闘をなす、是れ三段目にて、是れよりシテは病床に取り掛らんとしワキは之れを遮ることあり、太鼓の打上となり、爰に働き終りて、シテは氣を掛け威ひよく謡ひ出す。

いかに行者早歸り給へ、かへらで不覺し給ふなよ

ワキは最も強く丈夫に。

たとひいかなる惡靈なりとも……

地のサラリと丈夫に謡ひ進むと共に、シテワキ共に立ち上り、互ひに追つまくつゝ奮闘の末、遂に惡靈は祈り伏せらるゝことゝなり、シテは打杖を捨て平臥し、両手にて耳を覆ひながら。

あら〳〵恐しの般若聲や

幾干か沈着なから氣を寛めず。

是迄ぞ怨靈此後又も來るまじ

シテは大に謹慎を表する態度にて爰に段落を告げ、恨みは悉く飛散し、怨靈退散の心にて。

讀誦の聲を聞く時は……

心持は雲泥の差なれども、さりとて謡の撓む時は、能の結末振はざることゝなる故、氣は替れども謡は垂れず、シツカリと謡ひ進むに伴れ、シテは扇を開き持ち、讀誦の聲と扇を遣ひて心の轉化を示して立ち、惡氣心を和げと足拍子を踏み、菩薩も爰に

と卷きさし、來現と拍子、成佛と右廻り正面を拜して止めとなる、暗雲晴れて、月光中天に輝けるの想ひあらしむ。

雨月

前シテ……老翁　ツレ……嫗　後シテ……住吉明神
ワキ……西行法師　處……住吉

此の曲に就ては古今集の序に、男女の中をも和げとあるを本として作れりと言ふ説もあり、又西行自作の撰集抄に記載せる江口の尼の物語を飜案敷衍せしものなりとの説もあれど、要するに「月はもれ雨にたまれと」云々の古歌を基として作られしものに相違なし、何れを先と見定める程の考證も有せざれ共、此作と砧の作との間には、何となく似通ひたる點ある樣に思はる、本より砧は物思ひある女の、結ばふる心を慰めんとて砧を打ち、遂に思ひに死するといふことなれば陰欝なること言ふ迄もなく、是れは神の化顯にて、西行の和歌の力を試みん爲め、態と雨月の爭ひを爲すといふ筋なれば、毫も陰氣を含む筈もなく、大に趣きを異にせざる可らざる譯なるに、實際に謡つて見ても、讀んで見ても、自然聯想を免かれざるは何の爲めなるべきか、雨月のことを謡へる中へ突然と砧のことを加へたるも妙にて、中入の趣きの似通ひたるも一奇なり、兎に角に何となく重々しき能柄にて、老功者にあらざれば勤め難きものたるや疑ひなし。

囃子方座着て後、先づ板にて半ばを葺きたる屋形の作り物を脇座より少し下りたる所へ出し、ツレの姥先づ出でて作り物に入り座し、シテ老翁次でツレの次へ腰を掛くる。

右座の定まるを見て囃子方の打出す重々しき次第に伴れ立ち出づる僧は西行法師行脚の體にて、徐に舞臺に入りシックリと次第を謡ふ。

心を誘ふ雲水の、ゆくへや何處なるらん

地取りに正面へ直し、慎重の位を持しシックリと名宣る、西行法師といふ人は如何なる性格の人といふ方よりは、雨月といふ能柄に對してワキの位も定まるものにて、此の能柄何となく物々しく、後半の舞も眞の序といふ極めて靜かなる舞なれば、能の位としては十分に莊重ならざる可らず。

打切の位に基きてシッポリと仲々と道行を謡ふ。

住み馴し鞍馬野の奥を立ち出でて……

道行濟みてシックリと着セリフを謡ふ。

急ぎ候程に、是れ早住吉に着きて候

以上は通常の着セリフなれども此の以下の詞は尋常と違ひ、此の文句によりて住吉の浦に着て幾干の時間あり諸所を見物して日の暮るゝに至りし次第も知れ、彼方遙かにチラ〳〵と見ゆる燈火の影あり、誰人の住家なるかは知らねども一夜の宿とすべき家のあることも知れ、知らぬ人の家に一宿せんとせる西行法師の胸中の洒々落々たる趣きも察せられ、此家の何となく物ありげにて尋常人の住家ならぬ感も惹かる、是れ此のワキの位の無くて叶はぬ所にて、此數句の謡方の巧拙によりて此の雨月といふ能の模様に大影響あり、老功者にあらざれば勤め難き役といふべし。

前に出せる作り物の異樣なるにて既に此の家の尋常ならざるを想像され、次で内に座する翁嫗を見て愈々唯者ならぬ心地せられ、今またワキの詞によりて更に此の一軒家の物ありげなるを思はしむ、靜中に動を感せしむる能樂の妙味は實に此の邊に存するものたるを知らざる可らず、斯る感を惹くに就ては、囃子方及地謡方の態度、作り物を打ち運ぶ後見人の動作等其の關係すること頗る大なり、雨月といふ能柄を能く辨へたるものにあらねば一人と雖も舞臺の上に出でしめざる丈けの注意を要すべきならん。

物淋しき秋の夜、神々しき住吉の社前、冴え澄る月影に物々しき老翁の感興を叙ぶる風情シッポリと伸びやかに。

風枯木を吹けば晴天の雨……

ワキは徐に立ち寄り案内を乞ふ、此の應答例に異なるなし、唯ツレの突然主翁の辭むにも頓着なく世捨人なれば入らせ給へと宿を許さんとする所に於て大に其の趣きを異にす、ツレ無頓着にサラ〳〵と。

のう〳〵是は世を捨人痛はしければ入らせ給へ

連吟となる丈け折れ合ふこと勿論なれども滯らぬ樣にシックリと。

去りながら秋にもなれば夫婦の者……

此の兩人の詞によりて雨と月との爭ひなるを知りたるワキは十分に力を入れシッカリと。

扨は兩月の二つを爭ふ心なるべし、月は何ぞ雨ばいかに

姥はサラリと。

姥は元來より月に愛でて、板間も惜と軒を葺かず

翁はシックリながら滯らず。

祖父は秋の村時雨……

ツレはサラリシテはシックリの兼合ひにて次第に呼吸も詰みて謠ひ進みシテは勢ひよく伸々と。

賤が軒端を吹きぞわづらふ

右一句を謠ひ終りてフト心付き熟慮しながら吟ずる心持にて靜に前の句を繰り返す。

賤が軒端を吹きぞ煩ふ

此の變化の心持こそシテの謠所にて注意して聞くべき所、更に心持を換へ、サクリと覺りたるものゝ如く輕く。

面白やすなはち歌の下の句なり、此上の句を繼がせ給はゞ、御宿は惜み申すまじ

ワキはシッカリと伸々と。

本來我も和歌の心其理を思ひ出づる

此の末をシックリと据ゑ、和歌を詠ずる心持にて伸々と。

月は洩れ雨はたまれと思ふには

シテは隙さず受けシックリと。

賤が軒端を吹きぞわづらふ

シテ、ワキ連吟にて朗かに伸々と歌を繰り返しまに心持を換へシテ一人にて輕くサラリと。

面白の言の葉や

地は隙さず受け滯らぬ樣にシックリと。

實に理も深き夜の、月をも思ひ雨をさへ、厭はぬ人ならば、こなたへ入らせ給へや

此の地謠の内にシテは手をさして案内する心を示しワキは悠々脇座に赴き座す、案内を乞ひしより此ワキの座着迄の間は句々皆心持ありといふべき謠場所にて最も趣きある面白き所なり。

更に心持を換へ伸々と雨月の爭の調和せる心持を謠ふ。

折しも秋半、三五夜中の新月の……

ツレは勢よくサラリと。

のう村雨の聞え候

シテはシックリながら引立ちたる心にて。

實に村雨の聞ゆるぞや

雨月の爭ひは西行の和歌にて調和され、月を愛でし嫗によりて村雨の襲來を報せられ、翁亦之れに和して其の音を聞けば、雨にはあらずして秋風の木の葉を誘ふ音なりといふ意を互ひに謠ひ進みて勢ひよく地へ渡し、地も勢ひよく受けサラリと麗しく謠ふ。

雨にてはなかりけり、小夜の嵐の吹落て

此一段此の雨月中第一の要所にてシテもツレも小夜の嵐といふ所より立ちツレは笛

座の上に座し、シテは文句に合せ仕舞あり、此の一段の文章たるや、雨と月とをもちりて巧みに景趣を叙したるものにて別段深き主旨を含まず、此の一曲亦深き意味あるにあらず、一首の古歌に基きて雨月の爭ひを起し、之れを種として、住吉の名所に秋の月の景趣を顯はす、名歌の響きか、筆者の働きか、文藻の靈光赫燿たりといひつべし、一陣の松風木の葉を吹き拂ひて深夜唯明月の晃々たるを見るのみ、一波瀾治りてシンミリと靜り、シテは最も沈重なる口調にて。

はや夜も更たり、旅人も御休み候へ……

地も特に重々しくシッカリと。

老衰の眠ふかき、夢にかへる古へを

一種風變りの中入にて、恰も神仙界に入りたるの思ひあらしむ、來序といふ靜かなる拍子に伴れシテ、ツレ共に靜々と幕に入る、西行法師は既に夢中の人たるなり。

中入中に前の作り物を取り入れ幣臺に幣を載せたるものを正面へ出す出羽と稱する拍子に伴れて後シテ出づる、石王尉と稱する神々しき尉の面、白垂の上に初冠を頂き、厚板の着付に色大口を穿き、狩衣を着し、色鉢卷、腰帶を結び、扇を持つ、住吉の神靈神官に乘り移られしものにて、橋掛に立ち、莊重たる口調にて滯らぬ樣シックリと朗かに謠ふ。

あら面白の詠吟やな……

地謠の顯れ出しといふ所より舞臺に入り幣臺の前に坐し扇を置き幣を取り、シックリとノットに掛る。

抑も此神の因位を尋れ奉るに

謹上再拜にて幣をふり戴きて之れより眞の序と稱する靜かなる舞となる、流義により場合によりては此の眞の序をイロエに換ることもあり。

眞の序終りて打上引立ちてシッカリと地は謠ひ出す。

有難の影向や……

形として別段の事もなく、謡もシツカリと莊重にして引立ち、本の宮人となりてより通常人となりたる丈けの心持ありシックリと終局となる。

巴

前シテ…里女　**後シテ**…巴の亡靈
ワキ…旅僧　**處**…近江

女修羅と稱し修羅能中一種特異の色を出せる能なり、朝長も女修羅なりといふものあれ共、是れは又一種特別のものにて、女といふも現在の青墓の長者にて、修羅といふべきは唯後半のみ、前は恰も普通の鬘物即ち女物に異る所なし、巴に至りては即ち否らず、前後通じて共に巴の亡靈にて、前半里女と見せしは、賴政寶盛等の老翁となり、敦盛、知章の若男となりて顯はるゝも同じ筆法なり、後半其の本體を顯はして戰場の物語をなすこと亦普通修羅能と同一にて、全然修羅能と其の趣きを一にす、然れども其の主人公の女性なる丈けは、自ら他の男修羅とは其の揆を同うせず、勇壯の內にも優しき所あり、烈しき中にも何となく靜かなる趣きを含む、可憐にして壯なる點こそ此の能に就ての特色ならめ。

囃子方坐着きて次第を打出し、此の囃子に連れて一人の旅僧出で、舞臺に入りてスラリと次第を謡ふ。

行けば深山も朝もよい、木曾路の旅に出ふよ

地取りにて正面向き木曾路より出でて都へ入る由をいふ、形式上之れを名宣と稱すれ共、唯行脚の僧にて何某と名のるにはあらず。

是ば木曾の山家より出たる僧にて候……

打切ありてサラリと道行を謡ふ、此の文句によりて木曾山中より近江國粟津ケ原の古戰場に迄たどり着きたることを知らる、前へ三足程出で折返して元の所迄歩むは道中歩行の模樣を示せるものなり。

旅衣木曾の御坂を遥々と……

着セリフと稱し粟津ケ原に着せし由を述べてワキ坐に至りて坐す、是れ全く此の曲の主人公を出顯せしむる前提にして、此の能の主人公たる巴女には因緣深き木曾山中より出たる僧の其の主人たり情人たる人の戰死の地に來ることの偶然にあらざるを知らざる可らざるなり。

大小鼓のアシラヒにてシテ出づる、面は小面、孫次郎、增の類、箔の着付に唐織の着流し、鬘、同帶等總て若女の裝ひ、流義により扇を持ち出づると水晶の珠數を持ち出るとの別あり、舞臺に入り普通のシテ柱の前に立ち、やさしくスラリと謠ふ。

面白や鳴の浦波しづかなる……

謠の末の所にて正面へ出で坐し拜をなす。

僧は此體を見て詞を掛け、問答常の如く、ワキはスカリ、シテはシッカリの兼合にて大體滯らぬ樣にスラリと謠ひ進み、ワキ合掌して神を拜する形をなしながらシッポリと地へ渡す。

地は滯らぬ樣やさしく伸々と謠ひ、何となく夕暮に顯れし亡者の消え失する趣きを見せ、シッポリと中入となる、シテは「さる程に暮て行く日」と西の方を見やり「入相の鐘の音の」と梵鐘の音を聞きつゝ立ち正面へ出で左り廻り、旅僧の方へ向ひて訴ふる所ある如く、朦朧たる裡に消え失する姿、趣きありて見所なり。

間狂言所の者出でて、ワキとセリフあり、義仲及び巴の事を物語りて退く。

僧は所の者の物語にて愈々巴女の亡靈の顯れし奇特に感じ義仲巴等の亡き跡を吊ふべく待謠をシッポリとうたふ。

勇ましき一聲の拍子に連れて後シテ出づる、是れ巴の武裝せる正體にて、面は前と同じ、大口を穿き唐織を壺折に着、黑垂れに梨子打を頂き、長刀をかたげ、橋掛りに立ち、サラリと勇ましき中に女たる趣きを失はぬ樣に謠ふ。

落花空しきを知る……

地は伸々として威ひよく謠ふに連れ、シテは雄壯なる擧動を示して舞臺に入り常の立所にて長刀を突き脇へ向つて立つ。

罪も報いも因果の苦しみ……

ワキは隙さず掛りて謠ふ。

不思議やな粟津が原の草枕を……

シテはシツカリと。

中々に巴といつし女武者……

互ひに謠ひ進みて勇ましく地へ渡す、地は隙さず受け浮きやかにキラリと謠ふ内に何となく物憐れなる趣きを含む。

粟津の汀にて涙の打死末迄も……

シテは地謠に連れて前へ出「女として御最期に」でワキに向ひ「捨てられ參らせし」と訴ふるが如く泣く、勇壯の内にも涙ある所女武者の本性にて此の能の趣きも同じく此の點にあり「最期に臨んで」といふ所で床几にかゝり曲となる、サラリと滯らぬ内に何所となくやさしく憐れなる氣色を含む。

扨も義仲の信濃を出させ給ひしは……

「順緣に吊はせ給へや」とシテは僧の方にアシラヒ打切りありて一段落を告げ、一際引立ちてロンギとなる。

さて此原の合戰にて……

故主奮死の狀を追懷しての物語りなれば自然に氣色ばみて勇氣凛然たるものあり、「深田にかけ込み」と右へ踏み入り「弓手もめ手もと」左右の下を見込み「手綱にすがつてむちを打てども」と左の手にて綱を取る形をなし右の足にて拍子を踏むなど、此邊總て義仲危難の狀況を語る所にて床几儘の形は注意すべき見所なり、「かゝりし」よりは巴自身の擧動に移れば　義仲奮鬪の場とは其の趣きを異にし、自然にやさしく憐れなる氣合を含む、シテは此所より立ちて正面へ出でて長刀かい込み下に居り、「三

世の契り」とシツクリと手を突きて頭を下げ、「涙に咽ぶ」とシヨル。「かくて御前を立上り」よりは更に氣を替へ猛然と突立ち上り、女武者の勇氣逞しり出づる、されども元來が女性丈けに兼平奮戰の場の如く烈しからず、作者其狀を形容するにも木の葉返し、花の瀧浪等の文字を用ゐたる注意を思はざる可らず、併し此所こそ此の能中第一の活動場所にて、シテの形としての見所なり。

「跡も遙かに見えざりけり」と靜り「今は是れ迄なり」と更に篤と沈着き、沈着くと共に更に女性の本にかへり、鎧の袖も涙の露に浮くばかりの風情なり、シテは正面の本の所に來りて下に居り、死骸を見て愁傷の趣き言ふ迄もなし、此邊り最も謠所にて、觀客を感せしむること其七八分は、地謠の力にあり、シテは正面に直しある小袖を取り押頂きて十分名殘を惜しむ心にて立ち去り後見坐にクツロギて、唐織、梨子打、太刀等を取り白衣を被り太刀を左に持ち笠を右へ持ちて出でて涙ながらスゴ〳〵と落ち行く趣きは實に此の能の掉尾の見所聞所なり。

大原御幸

シテ……女院　ツレ……法皇　同……內侍
同……大納言局　ワキ……萬里中納言　ツレ……大臣
處……山城

此の能は平家物語、源平盛衰記などにある後白河法皇の大原寂光院に御幸あり浮世を厭ひて住ませ給へる建禮門院を訪ひ慰め給ひしことを種とし、文章も多くは其の原文を取り用ゐて謠に作りなせしものにて、彼の謠曲は古文を剽竊せりといふ論者より見れば、證據として提出するに便りよきものなるが、記者の如く謠に古文を引けるは、能として見る者に娯樂を與ふる爲め最も必要の手段にして謠曲作者の手腕は反つて此の點に於いて稱賛すべきものありとせる眼より見るときは、此の謠の如きは大に講究すべき價あるものと思はるゝなり、併しながら此

の謡は餘り多く原文を採用するに勉めし丈けに、少しく過食の氣味ありて、消化力に於て幾干か、十分ならざるかの憾なき能はず、されば能を見ても、謡を聞きても、上達者にあらざる時は、所謂ダレ氣味となりて倦厭を招くの恐れなしとせず、然れ共元來其の曲納に於て、世人の同情を惹き易く、且つ貴顯の御身に羅りて品位と幽雅の趣きを具備したれば、能く其の缺を補ふ丈けの手腕ある人の演ずる時は、又容易に他に比すべからざる、高大優美の曲となる、是れ此の曲が重き物柄として世に尊ばるゝ所以ならんか。

囃子方着坐後藁屋の作り物を引廻しにて包みたる中にシテ及ツレ二人入りたるものを持出し、大小の前の所へ置く、流義によりてはシテのみ作り物の内に入りて出、ツレ二人は後より徐に出で笛坐の上に坐すもあり。

作り物出て後、ワキ連の大臣一人出でて名宣る。

是は後白河院に仕へ奉る臣下なり、扨も此度先帝二位殿を始奉り……

右詞終り幕の内へ入りて後、作り物の引廻しを下し、シテは花の帽子、色なし唐織又は厚板の着流といふ尼法師の姿にて水晶の珠數を持ち腰桶にかゝり居りツレ二人亦熨斗目花の帽子といふ尼の姿にて左右に坐し居る、流義によりてはシテ一人のみ作り物の内に坐せるもあり、いと物淋しく靜かに品位よく謡ひ出す。

山里は物の淋しき事こそあれ、世の憂よりは中々に

以下ツレ二人も加りて連吟となれども流義によりては「人目なきこそ安かりけれ」迄をシテ一人にて謡ひ、以下の下歌、上歌は地にて謡ふもあり、何れ共此の所は女院閑居の模樣を示す所なれば、シッポリと品位よく物淋しく謡ふべきなり、流義によりては「草顔淵が」と右の方を見「雨原憲」と正面に直す形をなすもあり、「うるほふ袖の涙かな」とシホルは何流にても同じ形なり、此所唯謡を以て幽靜の模樣を顯すものなれば、此の謡の大切なること言ふ迄もなし、僅の所ながら假そめに聞くべき所にあらず。

シテはツレの方へ向ひ静に。

いかに大納言の局、後の山に上り榾を摘み候べし

大納言の局はシテの方に向ひ、静かながら位をシテに譲りて。

妾も御供申、妻木蕨を折り供御に供へ申候べし

シテは作り物の内より出て正面向き立ちて静かに品位よく伸々と謡ふ。

たとへば便なき事なれ共……

前のシテの謡出の山里は云々もサシ此のたとへば云々もサシにて同じ節なれ共、此の二個所の謡が同様にては面白からず、同じ謡方の謡を同じからぬ様に謡ひ分くるがシテの働きなり、前は侘びしき山居の模様なれば物淋しく、爰は山入りに付き悉達太子の難行を思ひ出し、我も山路に分け入らんと氣を勵ましたる所なれば、前者に比して浮き立ちて麗はしく謡ふこと勿論なり、且つ「菜摘み水汲薪」と地へ渡す所の謡は大に心持ちある所にて注意して聞くべき要所なり、薪と締めて渡すを受け、地もシッ

クリと謡ひ出し伸々と静かに謡ふ。

とり〳〵様々に雜行す……

シテは「我も佛」よりへ右へ受けて出で、「猶山深く入り給ふ」と開きて静かに中入となる、ツレはシテに續て立ち、シテの後より共に中入し、内侍のみ跡に殘る。

一聲の拍子に伴れて法皇を先に立て、ワキ出づる、法皇は花の帽子、厚板の着付、指貫、單狩衣に掛絡を掛くる、流義によりては角帽子、水衣、大口とするもあり、何流に拘らず輿に乘りて出づ、舞臺に入り正面を向き、脇は黒風折、厚板、長絹、大口の裝ひにて其後に隨ひツレと共に威ひよく伸々と一聲を謡ふ。

九重の花の名殘を尋れてや、青葉をしたふ山路かな

打切にて位を定め麗しく次第を謡ふ。

分け行く露もふかみ草、〳〵、大原の御幸急がん

地取りの間に法皇は少しく舞臺の左手へ寄るもあれば又橋掛り一の松の所へ行くも

あり流義によりて一樣ならず、ワキは着セリフ濟みて後左のサシを謠ふ。

かくて大原に御幸なって

右は脇の第一の謠場所にて流義により吟にも強弱の別あり、脇寶生の如きは最も變化に富み、一種の闌曲を聞く思ひあり、最も注意すべき聞所なり。

法皇の左の謠は一首の和歌を詠ずるに過ぎざれ共輕んず可らざる謠所にて、法皇の位は一つは此の謠によりて定ると言ふも不可なし、大切なる謠といふべし。

法皇　池の汀を叡覽あって……

地は餘りに重くれず麗しき左の小謠を謠ふ、此の所はシテ未だ登場せず、ワキツレの場故謠の位は輕きが本意なれ共、寂光院の風景を謠ふものにて場所柄丈けの趣きを顯はさねばならず、位重からずして幽靜の趣きを示す此の謠の注意點なり。

ふりにける岩のひまより落ちくる……

ワキは爰にて作り物の方を向きて。

是なるこそ女院の御庵室にてありげに候、軒には蔦朝顏はひかゝり、黍蓍ふかく鎖せり、あら物すごの氣色やな

右の謠は庵室の物さびたる樣を叙するものにて亦大切なる謠所なり、此邊總て謠を以て寂光院の風光を觀客の頭腦に泌み込ましめるものにて容易ならざる聞所なり。

ワキは氣を換へ品位よくシッカリと。

いかに此庵室の内へ案内申候

内侍は立ちて作り物の側へ參り。

誰にて渡り候ぞ

此の應答終りてワキは法皇の前へ行き頭を下げて恭しく。

御幸の由申て候へば……

ツレは作り物の傍に坐して居り、法皇はツレを見て鷹揚に。

やあいかにあの尼前、汝はいかなる者ぞ

内侍は謹みて優しく位取らず。

げに〳〵御見忘れは御斷り、是は信西が娘阿波の内侍がなれる果にて候

一段と沈痛なる口調にて、シックリと。

かくあさましき姿ながら、明日をも知らぬ此身なれば、恨みとは更に思はずさむらふ

法皇と内侍との應答終り、囃子方のアシラヒに伴れてシテと大納言の局出で橋掛りに立ちて靜かにサシを謡ふ、前のシテの出、中入前のシテの謡と同じサシなれ共其謡方の心持に就き差異あることは其の文句柄によりて大に翫味すべき所なり、此の後の出は最も世を悲觀して、世を去りし一門の人々の爲めに、平臥極樂往生を祈る所なれば最もシメヤカに謡ふべきならん。

昨日もすぎ、今日も空しく暮れなんとす……

一心に念佛を唱へつゝある所に、我が侘びて住む庵室の方に人音のするを聞きて、さも不審かる心持にて。

や、庵室のあたりに人音の聞え候

何事の起りしか暫く此所に休息して事の由を確かむるに如かずと見て、大納言の局は恭しく。

暫く是に御休み候へ

兩人共に橋掛りに立ちて居り、内侍は是れを見て。

只今こそあの嘖づたひな女院の御歸りにて候

法皇は遥かに是れを見給ひて。

扨何れが女院、大納言の局は何れぞ

内侍は之れを説明すべく麗しく伸々と謡ふ。寫實的に是れを論ずれば、此所も同じく詞にて説明して可なる如くなれ共、爰にて麗しく聲を張り上げて謡ふものは、全く樂曲としての彩りにて、此の場の趣きを添ふるなり、謡ひながら内侍は起ちて橋掛りの方へ行き恭しく。

いかに法皇の御幸にて候

シテは一度は驚き、一度は忝く、一度は恥かしく、萬感交々胸中に涌き、勉めて心を鎮る心持にてシツトリと。

中々に猶妄執の闇浮の世を……

地はシツクリと受けて靜かに。

とは思へども法の人、同じ道にと頼むなり

上歌は其れ丈けに張りて謠ふこと勿論なれども、意外の出來事に涌き出づる此の場の感慨を叙して、涙に袖を濡す所なればシツポリと謠ふ。

一念の窓の前……

此所は橋掛りに在りて朧の清水と一の松の所へ進みて水に影を寫す形をなすもあれば又實や君爰により舞臺に入りシテ柱の前に立ちて影を寫す形をなすもあり、形としては曲中大に注意すべき要所なり。打切にて氣を換へ麗しくロンギを謠ふ。

扨や御幸の折しもはいかなる時節なるらん……

是れは法皇御幸の時の模樣を叙したる原文を取り、此曲に艶を添ふる爲めロンギとして謠はせることゝせるものなれば、曲中第一艶麗の個所にて、シテも謠ひながら文句に合せての風情あり、單に實際の順序より見る時は、法皇の御幸と聞きなば、何は兎も角、急ぎ我が庵室に入りて御挨拶も申上げらるべきに何の爲に永々と謠ひ居りて容易に法皇に御詞を交はされぬやと思はるれども、是れ此の原文を取りて此の曲を構成せるに付き作者苦心の存する所にて、此のロンギの一節を取り去る時は、悲慘なる物語のみとなりて、曲面に艶氣乏しくなるを慮り、少しく冗長の恐れあれ共、尙爰に此のロンギを加へしものなるべし。

「あるべき住居なるべしや」とシテは法皇に向ひ下に居り、靜かに左の歌を謠ふ。

思はずも深山の奥の住居して、雲井の月を餘所に見んとは……

法皇の問に對し、シテは氣を換へ、凛然として侵す可らざる氣位にてシツクリと。

勅諚はさる御事なれども

詞より「クリ」に移る所は工夫ある謡所にて、クリは氣を張り伸々と立派に謡ふ、或る流義にては、「根を離れたる草」の根の廻しより離れて移る所を縁の節と稱し離れたる如くにして離れざる謡方の口傳ありともいふ、注意すべき聞所なり、地は隙さず受けて伸々と氣を張りて。

命を論ずれば江のほとりにつながざる船

本ユリにて調子を下げ、シックリと折り合ひて滯らざる樣にサシを謡ふ。

されば天上の樂しみも

「六道の巷に迷ひしなり」とシッポリと鎮め、打切にて位を定め、靜かにクセにかゝる。

先づ一門西海の波に浮沈み……

序より起りて又或時はより破の位となり「陸の爭ひある時は」より急の心持となる、此の序破急こそクセに取りて大切の心得なり、注意して聞く可き所ならん。

更に法皇の問より起りて西海の合戰の物語となる、此の語こそシテに取りて大切の謡所にて、品位ある女性の軍物語といふが既に困難なる事柄なるに、御子たる先帝並に御母たる二位殿等入水の狀を物語らるゝなれば、其悲痛言はん方なけれ共爰にて深く打ち沈めることゝなりては、曲として引立ず、十分なる悲哀を内に籠めて、垂れざる樣に謡ひこなすこと凡手の能すべき所にあらず。

「今ぞしる」といふ御製の初句を謡ふシテは、十分に氣を張りて威ひよく謡ひ、地は隙さず受け氣を掛けて謡ひ、自からも、よりジリリッと鎮め、「不覺の涙に袖をしぼるぞ恥かしき」とシホル所迄、シッカリせる内に緩急あり掉尾の働き容易ならざる謡所なり。

「いつまでも」より聲を換へ心持平和となりて、滯らざる樣に謡ひ、「早還幸とすゝむれば」より法皇を先に立てワキ及ワキッレ等次第に幕に入る、シテツレも共に立ちて

見送り、シテは作り物の前に立ちながらシットリと。

女院は柴の戸に……

地もシツクリと十分に謠鎮むるにつれ、シテはシホリて止めとなる、此所の形には種々の變りあり、僅かの間に無量の感慨を漏す所一語千斤の重みありといふべし。

松　虫

シテ……男　ツレ……男　後シテ……男亡靈

ワキ……商人　處……攝津

阿倍野の松蟲塚を元として此の曲を產みしか、此の曲が種となりて松蟲塚を產みしか、將又古今集の序文より出しか、其の出所はともかくも、友といふことが主腦となりて此の曲を構成せしことは疑ひなき所なり。

脇の酒賣の商賣氣を離れて酒友を求むるに切なるを手始として、立出る市人も、皆友人を誘ひ合せるもの、引ける故事も古語も皆友に其緣を求め、語る所亦友人を忍ぶといふことにて、松蟲も亦友とせるものゝ一つなり、終始友を以て一貫せる此曲として味へば趣味甚だ深し。

時は秋、所は阿倍野、松蟲の音を慕ひ行きて草露に臥して空しくなりし友の跡を追ひて共に亡せにし人を懷へば、淋しく懷かしき感想は自然に湧きて、何となく我身も其所に引き付らるゝ心地せらる、淋しき景、懷かしき情、去らんとして去る能はず、捕へんとして捕ふ能はず、物淋しき風景情事に酒を配して爰に一道の和氣を導きしは作者苦心の存する所にして、此和氣あるが爲めに後段の舞を呼び起し、活氣の內に蟲の音を競はしめ、勢ひよく局を結ばしめ得たり。女郎花と此曲は姉妹曲にして共に大體の景趣を主とすれども、彼れは男女の情事を稚として其の事實明瞭なるに引換へ、是れは事實茫漠として詩的なり、されば一見しては甚だ理解し難きが如くなれども、些細に達觀すれば、趣味津々として盡きざる

所あり、彼れは事件の外男山八幡宮の觀望を叙して其の美を添ふることゝしたれども、是れは友を忍ぶの一事を以つて全曲を貫き一切他の助けを借らず、我輩は作者の手腕としては彼れを妹とし是れを姉とするに躊躇せざるものなり、幽雅深遠にして而も和樂の氣を離れざるもの此曲の要領ならんか。

囃子方着座後、段のしめ、素袍上下姿のワキ出、常座に立ち優雅に名宣る。

是は津の國安部野の市に出て酒を賣る者にて候……

次第に伴れてシテツレの男打揃ふて出づる、裝束は段のしめ大口に掛素袍もあれば、流義によりては大口を穿かず、水衣の肩上げとするもあり、ツレは何れも無地のしめの着付にて、シテの大口を穿く流義にては素袍上下なれども、大口を穿かぬ方となれば、ヨレ水衣を着る、舞臺に入り向合ひて、中の位を以て次第を謠ふ。

舊の秋をも松蟲の、〳〵、音にもや友を忍ぶらん

地取りにてシテは正面を向き、品よく中の位にて。

秋の風更行まゝに長月の、有明寒き朝風に

向き合ひながら、ツレと連吟にサラリと。

袖ふれつゝく市人の……

打切にて落付きシットリながら滯らぬ樣に。

遠里ながら程近き……

更に打切にて氣を換へ引立ちながら優雅に。

鹽風も吹や岸野の秋の草……

安部野の原は面白やとツレと入り替りツレは笛座の上に行き座し、シテは常座に立つ、ワキは脇座に坐りたるまゝ、鷹揚にサラリと。

傳へ聞く白樂天が酒功讃を作りし琴詩酒の友……

シテに向ひ。

いかに人々酒召れ候へ

シテも立ながら優雅に滯らぬ樣。

我宿はきく賣る市にあられ共……

ワキに向ひ。

いかに人々面々に、醴酒を汲でもてなし給へ

以下問對常の如く互に謠ひ進みて、優美に二人揃ふて謠ひシツトリと地へ渡し、地は徐に受て輕く優雅に謠ふ。

今は秋の風……

藥ときくと出て開き、いざやみきとワキへ向ふ、地は打切にて氣を換へ伸々と滯らぬ樣美しく謠ふ。

たとひくるゝとも……

此打切にてワキはシテを外し、シテは右を受けて出て開き、其れより角とり左り廻りの後ワキへ向ひて開くなどの普通の立廻りありて此の一章を終る、此一章は次の語りを呼び起す前提にて、市人の酒屋の主人と相對して杯を傾け打興じて語り合ふものと見るべきなり。

ワキは、此の打興せる詞の端を捕へて質問を試む、是れ此曲の主題を解決せん爲めの手段にて筋を運ぶの順序なり。

ワキ「いかに申候、只今の詞の末に、松蟲の音に友を忍ぶと承候は、いかなる謂にて候ぞ

シテ「さん候夫に付て物語の候、語つて聞せ申候べし

昔此安部野の松原を……

爰に於てシテは大小前の常座に行て下に居り、シツトリと語る。

此語りこそ此の曲の主腦にて、蟲の音を慕ひ行く物哀れなる光景、草露と共に消え失せし人の悲慘の樣其跡を慕ひ行きて共に空しくなりし友情の懷しさ等皆此の語りの內に含まれし大切の場所にてシテとして大事の謠場所なり、靜かに打沈みて渡せるシテの謠を受けて地はシツトリと。

其のまゝ土中の埋木の……

「世にもれける」とワキへ向ひさめ〴〵と泣き入る、打切にて氣を換へ引き立ちながらシメヤカに。

今も其友を忍びて松蟲の……

人影にと立ちあべのゝ方へ行にけりと橋掛りへ行き一の松の邊にて立止り、不思議やと正面向きて「ロンギ」となる、此のロンギ又大切なる謡所にて、秋の夕暮に亡者の對談、蟲の音に和して物哀れなる光景、全く此のロンギの間に顯はる、注意すべき聞所なり、「實々思ひ」の邊りより再び舞臺へ入り、下に居て「有難や」とワキを拜み、「忍ぶか」と立ちて右へ廻り開きて中入となる、形として別段注意を要する程の個所なきも、目立つ形のなき程演者は難かしき譯にて、此深き趣きある景情は全く其シテの態度と謡の如何によりて顯し得らるゝなり。

中入中酒屋の顧客たるべき間狂言の市人一人出で來り、ワキとセリフの後、松蟲の友を忍ぶといふ故事に付き物語ること例の通りあつて、待謡となる。

一聲にて、黑頭、白鉢卷に、眞角、男增髮、三日月、あやかし等の面を被り、厚板の着付、法被半切にて肩を脱ぎし姿のシテ出、舞臺に入り、サラリト謡ふ、此一曲を序破急に分てば、中入迄は序にて、後シテの出より破となり、男舞以下が急となる譯にて、爰破の段の始まりなれば、前とはスツカリ心持を改め、威ひよくサラリと謡ふべきなり、但し鬼ものにもあらねば强きといふにあらず、此差別大切なり。

あら有難の御弔やな……

ワキはシテの終るを待ち、さも威ひよくサラリと。

早夕影も深みどり……

互に滯らぬ樣に謡ひ進みて潔よく地へ渡し、地は隙さず受けて勢ひよく麗しく謡ふ。

古郷に住しは同じ難波人……

芦火たく屋より出て開き「あらなつかしの心や」とワキへ向ひ出て下に居り、爰に一段落を告げ、クセ舞に移る順序としてクリ地に取掛る、クセは唯友といふ縁をたよりて數々の詞を集めし丈けにて松蟲には別段の關係なし、是れは能の形式としてクセ舞といふ一種別のものを挿みしまでにて、筋の運びには關係なしと見る方解り易し。

クリ地は山上より水の落ち下る勢ひにて、太く滯らず最も流麗に。

忘れて年を經しものを……

本ユリにてゆり下げ爰に調子を整へてサシに移る、サシは落ち下りし水の滯りなく下流に流るゝ姿にてサラリと。

朝に落花を蹈んで相伴つて出で……

流れ下りし水は一つの水門をクゞリて池水に入る如く、爰に一時の湛へを見せて打切となりクセに移る。

クセは廣き池水の如く、先づ細波を立てゝ漸次に進む。

一樹の蔭のやどりも他生の縁と聞ものを……

シテは爰より起つて普通のクセ舞をまふ。池水も亦序破急なき能はず、細波も水深ければ抑揚も強く奥山と張り上げてよりは破の位となり、夫は賢きの上羽よりは急となり、心持と形は相伴ふて、舞かなで遊ばんとクセ舞を終る、爰に一段落を告げては全く一曲の急の場となり、氣を張り威ひよく。

盃の

池水の更に閘門より落下して谷川に注ぐが如く、勢ひよく男舞に移る。

雪を廻らす花の袖

男舞といへば、彼の盛久、春永等の如く勇ましきものにあらず、亡者の夜遊といふ心に引合せてシットリと舞ふべきなり。

男舞終りて、威ひよく伸々と。

面白や千種にすだく蟲の音の

舞の後は松蟲の本音に復り、數々の蟲の相競ふて千種にすだく形容と安部野の光景を叙して、賑やかに局を結ぶものにて、謡に抑揚強く形に手數繁く、最も注意して見るべく聞くべし、曲終りて尙蟲の音のリン〳〵たるを聞くの想あらしむ。

大江山

シテ……酒呑童子　ワキ……源頼光
ワキツレ……從者　處……丹波

源頼光四天王等と共に大江山に酒呑童子を退治せりといふ昔語を種として作れる曲にて、其の事柄は三尺の童子も能く知れる所なるが、酒呑童子といへるは果して如何なる者のなれの果なるか、歴史家の穿鑿談を聞かば、或は傳敎大師の法敵として失意の境に立ちし一種の豪雄にはあらざりしか、此曲の作者も此の酒呑童子を以て獰猛なる惡鬼とせず、酒と秋草を借りて巧みに美化し、稚氣愛すべき趣きを見せ、間狂言を以て裏面に傳説の事實を説明せしめしは最も注意すべき所ならん、無邪氣の骨に光彩ある肉を附け、雄壯を以て後半を結べるは面白き作柄なり。

一聲にて山伏の姿せるワキ以下多數（五名、七名、九名等奇數のツレ幾人との限なし）立衆出で、舞臺に入り、勢ひよく一聲を謡ふ。

秋風の、音にたぐへて西河や、雲も行なる大江山……

ワキは正面を受けて。

抑　是は源の頼光とは我事なり……

ツレと掛合にて勇ましくサラリとサシを謡ひ進み一同に勢ひよく道行を謡ふ。

月の都を思ひ立、〳〵、行末問へば西河や波風立て〻白ゆふの……

道行終りワキは大江山へ着たる旨の詞ありし後、間狂言の從者を呼び出し、道に踏み迷ひたる體にて宿を取るべしと命じ、從者は其の旨を了して奥深く進み行き、フト

谷川にて血に染める衣を洗へる女に遇ひ、見れば衆て知れる都の者にて、勾引されて此山塞に在ると聞き、情をあかして手引を頼み、宿をかることゝなり、ワキ以下は脇坐に進み坐し、シテは出でて對面す。

シテは黒頭に童子の面、半切の上に唐織を坪折り、唐團扇を持ちて出で、腰桶に掛り、鷹揚に居付ぬ樣に謠ふ。

いかに客僧達、何くより何方へ御通り候へば、此曙家へは御出候ぞ

ワキはシテに位を讓りながら、丈夫に。

さん候　是は筑紫彦山の客僧にて候が……

此長渉りのシテワキの應答は中々の注意場所にて、シテは鷹揚に澁滯せず、ワキは丈夫にしてサラリと互ひに固有の位を保ちながら、次第に氣を張り呼吸を詰めて進む内に文句によりての抑揚緩急は聞所なり、地は隙さず受けてサラリと。

一見二王山とたて給ふは、神をさくるよしぞかし、御身は客僧、我は童形の身なれば、などか憚み給はざらん、かまへて餘所にて、物語せさせ給ふな

打切にて一段落附き、同じくサラリながら伸々と浮きやかに。

陸奥の安達が原の塚にこそ……

紫苑の一名を鬼の醜草といふより開宴中の肴として秋草を數へ曲面を美化したる作者の手腕は最も認むべき所にて此前半に可愛らしき趣きの見ゆるも全く是れが爲なり、此所にはシテの立形もあり、醉中興に乘じ打解けて語ふ樣は最も注意すべき見所なり、荒海の障子を開けると閉づるとは流義により文句に差あれども、既に開きたる障子を引たつると、閉ぢられてある戸を引き明ると其の形に於ては大差なく、寢所に入ると見せて中入となるは同一なり。

ワキは屹度シテの入りし跡を見送り、心に期するものある如くして是れ亦中入となる。

中入中に最前の間狂言兩人共出で來り、酒呑童子の寢屋の鍵を取りたれば之れを

賴光に渡し酒呑童子を討すべし、其功により兩人共恩賞を受くべければ都に歸り夫婦となりて暮すべしなど滑稽を演じて退場す。

流義により臺を脇坐へ出すと大小前へ出すの別あり、又後シテは宮の内に入りて出ると、衣を被き切戸口より出づるとあり、一聲にてワキ以下立衆は武裝して出橋掛りに立ちて最も雄壯に謠ふ、流義により左の謠の入ると否とあり。

夜嵐の、音すさまじき山影に、忍びて入るや梓弓

ワキは松明をかざし、舞臺に進み入り威ひよく。

既に此夜も更方の、空猶闇き鬼の城……

寢所の扉を開き、睡れる鬼形を認めたる樣をなしながら謠切て地へ渡し、地はシツカリ受けてドッシリと丈夫に謠ふ。

其丈二丈計りなる……

此所は唯謠にて其の形容を示せるのみにて、シテは未だ形を顯さず、ワキは神佛に祈誓を掛くる仕形をし、十分の決心を以て鬼神に對し、兵共を靡けば橋掛りに待構へ居りし立衆は獨り武者を先に立てゝ進み來り、鬼神をおつ取り圍みて、シテの形を顯すと共にワキ以下左右に別れ坐して仕構へシテはワキに向ひ、怒れる樣にて鋭く丈夫に。

情なしとよ客僧達、偽りあらじと言ひつるに、鬼神に横道なきものを

獨り武者は進み出で、威ひ猛くサラリと。

何鬼神に横道なしとや……

土も木もの古歌を詠じながら迫りて强く地へ渡し、地は隙さず受けて烈しく。

餘すな洩すな、攻めよや攻めよ人々とて、切先を揃へて切つて掛る

立衆は責め掛る態度を示して迫る、太鼓地となりて愈々猛烈に。

山河草木震動して……

シテは此謠の内に猛然と起ち、打杖を以て打ち掛り、是より働となり、ワキ以下

と奮闘す、ワキは切り結びたる後ワキ座に復して太刀さしかざしながら威ひよく。

（輪光保昌もとよりも）

地謠となりて後、ワキは起ち上りて切つて掛りシテと組合ひ、下より刺通し、爰に鬼神を退治して目出度終局となる。

皇帝

シテ……鍾馗ノ霊　子方……楊貴妃　ツレ……惡鬼
ワキ……玄宗皇帝　處……唐土

鍾馗の續きとも見るべき筋にて、脇能の一種なり、莊嚴なる宮殿と、美人の病床は春の花の霞に包まれて朧氣なる如く、明王鏡に影ずる病魔と鍾馗馬上の活動は、秋の月下に靈鳥の光りを放つて飛躍するが如く、莊嚴の内に色あり雄壯の内に光りあるこそ、此の能の本領ならんか。

囃子方着坐後先づ二つの臺を舞臺の左右へ出して相對せしめ、脇坐の方へは引廻しに包れたる宮を載せて子方其中に入り居り、一方の臺の上には大家體を載す、此作り物出揃たるを見て、囃子の打出す眞の來序に伴はれワキ（唐冠、色鉢巻、厚板、狩衣、腰帶）以下大臣（烏帽子、厚板、大口、狩衣、腰帶）出で、ワキは大家體の内に入りて坐し、大臣は地謠坐の前に坐す、眞の來序の打上を聞き、ワキはシットリと太く優美に謠ふ。

春は春遊に入つて夜は夜を專とし、後宮の佳麗三千人……

榮華に飽きし皇帝の尊嚴中に、我身も惜しからじと思ふ人の病を患ふる愛情は雨に惱める櫻といはんか、霞に被はる月と見んか、此のワキ第一の謠所なり、地はシットリと受け靜かに美しく。

たゞよわ〳〵と伏柴の、露の命もいかならん……

此の地謠中「心づくしの春の夜の」の所にて宮にかゝりし引廻しを落すと、其の中

に、鬘、同帶、唐織を着流しとせる子方、腰桶へ箔をかけたるを側に置き、病床に在る樣にて坐し居る、此の地謠の終る時幕を上げ、シテ（面小尉、尉髮、小格子、水衣、腰帶、扇）は呼び掛けの如く、尊敬の心を含み靜かに謠ひながら出づる。

如何に奏聞申すべき事の候

ワキは不審みながら、橋掛の方を見てシツカリと。

不思議やな宮中靜り物さびて、心を澄ます折節に……

シテは敬みながら物々しく。

是は伯父の御時に、鍾馗と言ひし者なりしが及弟叶はぬ事を歎き……

問對常の如くにて一の松の所迄進みしシテはドツシリと謠ふ、地謠の「申もあへず」より右廻り開き「御階の下に失にけり」と靜かに中入となる、不審しみつゝ見送りたるワキは子方に向ひシツクリと。

いかに貴妃、今日はいつしか曇る日の、暮るゝ夕も朧月夜の、晴ぬ心は如何なるぞ

子方はサラリと可憐に。

實にや衣を取り枕を推すべき力もなく、苦しき心にせきかぬる、涙の露の玉鬘、かゝる姿は耻かしや

ワキはいかにも切なる心持にて。

かはるに代る物ならば、かく苦しみを見るべきかと……

シツトリと地へ渡し、地は隙さず受けて、浮やかにサラリと謠ふ內に憂の心を含みて。

翠翹金雀とりくの、かざしの花もうつろうや、枕破の斜紅の、世に類ひなき姿かな

打切にて氣を換へサラリと浮きやかに但愁の心は離れず。

然るに明皇、榮華を極め世を保ち……

ワキは伸々と。

遁れ難しや世の中は

地は隙さず受け引立ちて。

思はぬ障り有明の、月の都のぶがくまで、學びのこせる方もなく……

此邊り總て皇帝の貴妃の病を患ふる心持を謠ふもの故に、愁を含むこと勿論なれ共、一方の能樂の原則として、ワキの受持場所なれば、大體に於てサラリと位取らぬが本體なり、ワキ場所にてサラリと謠ふ内に愁を離れざる所が此邊りに就ての注意なり、ワキは氣を換へ威ひよく。

實今思ひ出したり、彼の老人の教の如く、明王鏡を取出し、彼枕近く立置べきなり

大臣は威ひよくサラリと謠ひながら、鏡臺の正面に出す（此鏡の作物はクセの謠の内に後見坐へ持出しありて此時大臣へ渡す）大臣のサラリと威ひよく謠ひ切るを受け、地はシットリと物凄く。

かくて暮行雲のあし……

前より次第に氣を進めながら、爰より一段と位を進めて威ひよく早笛にかゝる。

不思議や鏡の其内に、鬼神の姿ぞうつりける

早笛にて惡鬼（面シカミ、赤頭、色鉢卷、厚板、法被、半切、扇）出で舞臺に入り開く、打上を聞て地はサラリと。

九華の帳を押退けて、〳〵、彼の御枕により竹の……

是れ此のツレの活動場所にて、鏡臺の前に立ちて、扇と笛と見立てゝ、戯れ狂ふ樣など中々の働き所なり、ワキは鏡面をキット見て、威ひよく。

帝は是れを叡覽あつて

地は隙さず引立ち威ひよく。

扨は病鬼よ遁さじと、劍を拔て立給へば、……

ワキは劍を拔いて臺より飛下り惡鬼に對して切り付け、惡鬼は之れを避けて、ワキの後を廻つて、ワキ坐の方へ行き、袖を被きて伏し、後見人は熨斗目を被せる、（熨斗目を被せぬこともあり）ワキは切りたる後、影を追ふ形ちに廻つて橋掛りの方をキッと見込みて、大きく。

不思議や曇る空晴れて、
地も大きくドッシリと。
宮中光輝きて鳴動するこそ怖しけれ

大べしにてシテ（面小ベシミ、赤頭、唐冠、色鉢巻、厚板、半切、狩衣、腰帶、劍を持つ、白頭にすることもあり）出で、橋掛り一の松の所に立ち、シッカリ堂々と。

抑是れは、武德年中に贈官せられし、鍾馗大臣の精靈なり……

「惡鬼は是れを見るよりも」にて、ツレは熨斗目を上げてシテの方を見（熨斗目なき時は袖を被りしまゝにて頭を上げ見る「驚き怖れ」と又本の如く伏す、「鍾馗の精靈馬より下り立ち」とシテは馬より下りし如くにし「袂をかざし」と左の袖を被き、堂々と舞臺に入り鏡面に對し、威風凛然たる有樣は、是れ此のシテの技量の顯はるゝ所なり、「鬼神の姿は隱れもなし」と、ツレは被きを取りて立ち、此所舞働となり、シテとツレとの切組みあり、ツレは元の所へ歸りてサラリと。

鬼神は通力自在も失せて
地は受けサラリと。
鬼神は通力自在も失せて、起きつ轉びつ走り出るを……

文句に伴れ惡鬼の怖れて逃ぐるを追ひて、鍾馗の精靈は遂に此の惡鬼を退治するこ」とにて曲を終るものなるが、此の逃ぐるを追ふ所にて、臺の上を通過し、又は橋掛りの柱に登るを引下す等、目先の變りたる形も數々ありて、最も賑はしく雄壯なり。

此の能前半に於ては玄宗皇帝の榮華の樣と我が寵愛する貴妃の病苦を患ふる情の切なるを示せるものにて莊嚴の内に色を含み、後半は病魔の活躍と鍾馗の精靈の雄飛とを示して奮鬪場裡に壯快を叫ばしむ、能く此の二段を區別して觀る時は賑はしく面白き能柄なり。

實盛

シテ……老翁　後シテ……實盛靈
ワキ……遊行上人　處……加賀

齋藤別當實盛加賀國篠原の合戰に於て戰死せしことを源平盛衰記等により叙したるものに相違なきも裏面には他方本願宗教の功德を彰し高僧の力により懺悔の爲め此の合戰の物諸りを爲すことゝなり居れり懺悔物語と云ふこと此曲に取りては注意すべき要點なり、能柄としては二番物即ち修羅物の内朝長と共に最も重きものとなす、朝長は前半は現在靑墓の宿の長の顯るゝ者にて殆んど三番物として見るべき價あり時としては纖法の出と稱する重き習能となることもあり、一種異樣なるもの故特に重きものとなり居れ共、其の節扱ひなり緩急なり、老武者としての位取りなり實際に於て舞にきく、謠がたき所は反て實盛の方こそ上位に在るかとも思ふゝ程にて先づ修羅物中の大關と稱すべきものならん、時宗緣起と謂へる書に、他阿彌上人篠原の地を過ぎ夢に實盛に會し特に一週間滯在して其跡を弔れしと云ふこともある由なれば此の脇は他阿彌上人を指せるものと見て可ならん、高僧に老武者、佛法の功德に引かれて懺悔物語りを爲すもの其の位の重かるべきは自然の數なり。

先づ脇僧三人大口、水衣、角帽子にて扇、珠數を持ち出る脇は厚板を着付としツレは熨斗目を着す脇坐に至り脇は床几に掛りツレは坐し徐に品位よく愼重に謠ひ出す。

ワキ「夫れ西方は十萬億土、遠く生るゝ道ながら
ツレ「爰も已身の彌陀の國
ツレは脇に位を讓り輕く謠ふべきこと勿論なれ共實盛と云へる能柄に伴ふ所の位は忘る可らず。

三人「獨なほ佛の御名を尋みん……

此の謠に引かれて實盛の亡靈たる老翁は橋掛り一の松の所へ迄顯れ出る、されば此の謠は弔ひの心持にて一種の待謠なり、其のシンミリとして聽者心耳を澄すの思を生ぜしめざる可らず、若し此の謠にして粗忽ある時はシテの出に困難を與ふること甚しかるべし。

シテ「笙歌遙に聞う孤雲の上、聖衆來迎す落日の前、あら尊とや今日も又紫雲のたつて候……

シテは面、三光、尉髮、熨斗目、水衣、腰帶の裝ひにて手に珠數を持ち出づる、御法の聲に引かれつゝ茫々と顯れ出づる姿陰々たる趣きあるべし、此所の詞には上掛りと下掛りとにて幾干の差異あれ共、早く念佛の庭に行き難有敎を受けんと希ふ心の切なる所は同一なり。

一念稱名の聲の内には……

此の節になる所より徐に舞臺に入り坐し脇を拜みて

南無阿彌陀佛

と謠ふ、此邊總て靜かなること勿論にして何となく底に物あり氣なる心持あるべし。

ワキ「いかに翁

シテ「御前に候

此邊の問答常の通りなれ共シテには何となく物々しき氣はひワキには自然備はる威望無かるべからず。

老の幸身にこえ悅びの涙秋にあまる

此所シヨリの形あり　自然シンミリと落付き。

されば此身ながら

幾干か心持に相違ありハッキリとなる。

名乘んこと口惜しうこそ候へ

文字に合せて心持あり。

シテ「さては名乘らでは叶ひ候まじきか

ワキ「中々の事急いで名のり候へ

下掛りの方は左の通り。

シテ「何と名を名乗れ

ワキ「中々の事

文章としては議論もあるべけれ共、何れともに此所に於て大いに心持のあることは相違なし、唯速に佛果を得んと望みし身の今更此に閻浮の名を名乗り妄執にかへらんことは亡靈に取りては非常の場合一波瀾の起ること自然の勢ひなり。

シテ「さあらば御前の人をのけられ候へ

用心堅固注意周到なり。

ワキ「本より翁の姿を餘人の見ることは無けれども……

愚念と思へども其の心を憐み容るゝ所高僧の器量裕々として大海の如し。

シテ「「昔長井の齋藤別當實盛は……

餘所事の如く遠廻しに云ひ出づる所後段語の名乗れ名乗れと責れども遂に名乗らずに照應して頗る趣きあり諾手の心にも亦此の趣きを味はざる可らず。

ワキ「夫は平家の侍弓取つての名將、其軍物語は無益

一度は其言ふ所に應じて答へながら一轉して此に名乗を促す所變化の妙味ふべし。

シテ「いやさればこそ其實盛は……

尙ほ明白に名乗らずして彼をして悟らしめんとす、閻浮の妄執にかへることを厭ふ心の深きを知るに足る。

ワキ「さて今も人に見え候か

一驚を喫したるに相違なし、され共高德ある僧の騷ぐ筈もなし、穩かなる内の驚きの心持こそ肝要なれ。

シテ「深山木の其梢とは見えざりし……

尙浮かとは名乗らず例を引きて徐に告ぐる所謹みの心持なればシッポリと。

老木な其れと御覽ぜよ

此に始めて此の老翁こそ實盛なれと名乘の火蓋を切る、既に名乘りて見れば心も安らけく、是れ和吟に變ずる所以にて作者の注意至れりと云ふべし、吟に強和の別あるも決して偶然に非ず注意せざる可らず。

ワキ「不思議やさては實盛の……

さてはそうかと覺れる心にて最早驚ける場合にあらず。

扨はおことは實盛の其幽靈にてましますか

愈々確めて問詰むる所、流義によりては此所より強吟となり池の仇浪より和となり、思ひをのみにて又強となり草葉の霜の返しの地謠より和となるもあり、此所強となるは確むる辭にて適する樣なれ共池の仇浪より和となる意味は分らず、斯る重き能柄故吟の變化も亦一つの位を附する氣味もあるべけれ共左して必要の變化とも思はず、個樣のシテソキの掛合より地へ渡す場合は次第に詰みて地は勢ひよく受取るを通常とすれ共、此所は何所迄もシットリと受け渡し、地謠も至極靜に謠ふ、篠原の草葉の露の翁さびと打切迄をシテに謠はしむるも此の靜かにしまる趣きを助けてのことなるべし。

亡き世語りも耻かしとて……

靜かに謠ひつゝある內シテは此所より徐に立ちて太鼓坐の前の方へ行き。

池のほとりにて

と正面へ直し開きて中入となる。

此の前半シテの技として特に注視すべき個所もなし、唯其位と心持の表彰さるゝ程度によりて其巧拙を判斷すべきのみ、之れによりて見ても能樂の基は謠にあることを知るに足る謠の不熟練なるシテ方は實盛の如き能は永劫務むること能はざるものと覺悟せざる可らざるなり。

篠原の池の邊りの法の水……

待謡例の通りシツポリと謡ふ。

鐘を鳴して　終夜。

太鼓の打出しにつれてドツシリ据ゑる。

南無阿彌陀佛……

コヽ合を聞て謡ひ出す、此所より強吟となるは後シテの出羽の位を定むる爲めにて老人ながら勇猛なる武者の顯るゝ所丈夫にシツカリと謡ふ。

後シテ面は前と同樣三光、白垂に梨子打烏帽子、白鉢卷、厚板の着付け、半切を穿き法被を着右の肩を脱ぎ、太刀を佩き扇を持つ、裝束は華麗かなるものを選むと聞けるは錦の直垂を着たる意を取りてなるべし、出羽三段目より出で舞臺に入り立ちて謡ふ。

極樂世界に入ぬれば……

靜かにシツカリと。

念々相續する人は

氣はノリて益々シツカリと、地もシツカリながらシテに位を讓り變化の妙を顯すこと肝要なり。

此所シテはサシ開き拍子廻る等普通の技ありて難有やと脇の方へ向ひ拜をなす。

不思議やな白みあいたる池の面に

夢中に老武者の出現、驚きたる心にて氣を掛けてハコビよく謡ふ。

埋木の人知れぬ身と沈め共

ドツシリと受け居付ぬ樣丈夫に。

脇はサラリとハコビてコケざる樣、シテは靜かに受けてメラざる樣、通常の兼合を以て次第に詰み威ひよく地へ渡し、地はシツカリ受けて丈夫に謡ふ。

暗からぬ夜の錦の直垂に……

打切の前に据ゑ拍子を踏み返しより出て開き今の身にてはと乘り拍子を踏み池の實

とさし開く等普通の形にて別段注目すべき程の場所にもあらね共老武者としての貫目と勇氣の樣を顯す所に注意すべし。

セリフ濟み。

實や一念彌陀佛即滅無量罪

と謠ひながら大小の前へ行き。

則回向發願心……

と床几に掛り。

有樣かたり申すべし

と脇の方を向く、此所サシに相違無けれ共一種風變りにて其の後ち語りとなれは止めの謠に心持あり語との取合肝要なり。

扨も篠原の合戰敗れしかば……

語の謠こそ後半シテ方の骨折所、居付かず騷がしからず、武勇の内に涙あり、ダンずコケず凜々しき中に自づと憐を感せしむるの働きを要す。

御前を立つてあたりなる……

威よくサラリと謠ふべきなれ共コケぬ注意は云ふ迄もなし、此所シテの技としても最も見るべき所、枝垂れし柳、清らかなる池水、白髮の首、流れ行く墨汁、數々の聯想を朗詠集の詩二句によりてうるはしく潔よく形容したる作者の手腕に對し之れを傷けずして能く墨を洗ひ流せし白髮首を顯出せしめ得るや否や、柳の絲と上を見、氷消えてはと下を見、浪舊苔と扇を以て水を掬ひかくる形をなし、墨は流れ落ちてと下を指し廻し、白髮となりけりと扇づかひをなすなど僅かの形にて此の限りなき景色、極りなき感慨を發揮すシテ方の職務も亦至難なりと云ふべし、嘗て豐公三百年祭の時の能に於て櫻間伴馬氏此のシテを勤めしに、此所の技の大きくして能くこたへしことは今尙ほ記憶に存して離れず妙技の人心を感動せしむる力も亦大なりと云ふべし。

あらやさしやとて皆感涙をぞ流しける

形は扇を持て手と打合せて後指丸し開き扇を疊みて落着き謡も此所でをさまり打切となる。

又實蛭が錦の直垂を着ること……

曲の謡も技も常の通りにてシブクシッカリの心持。

實や懺悔の物語……

ロンギとなりての心持も普通に變りなし何所迄もシッカリの心持なり。

鞍の前輪に押付けて首かき切つて捨てんけり……

此の所切の中にて第一の技所、扇に手を掛け押付くる仕舞、首をかき切る形など最も注意すべき見場所なり。

老武者の悲しさは……

少しく沈める心持なれ共餘り甚しき心持はダレ氣味となる、切の事故落人りては

あしゝ唯少しく文句に合せての心持ちにて何所迄もシブク丈夫の心持を外さず此の能を終るべし、老たりとも壯者も尙及ばざる勇氣と義心、流れ落ちたる墨に殘りて紅錦の譽れ末世迄も高し。

千　手

シテ……千　手　前　ツレ……平重衡

ワキ……狩野介宗茂　處……鎌　倉

現在の三番物、一つは優に艶しき白拍子、一つは幽囚の貴公子、濃き情交も遂に哀別離苦の悲劇に終りて配するに雨中の彈琴を以てす、風に揉まるゝ柳といはんか、雨に惱める花に譬へんか、しめやかに物哀れなる內に優美の趣きあること此曲の本領ならんか。

囃子方着座後厚板の着付に大口を穿き掛絡を掛けしツレの重衡は出て脇座に腰を掛け、梨子打烏帽子に白鉢卷、厚板の着付に大口を穿き直垂を着たるワキ續て出、重衡